

平成28年度
第27回 大好きいばらき作文コンクール
入賞作品

茨城県知事賞	(4名)
茨城県議会議長賞	(4名)
茨城県教育委員会教育長賞	(4名)
茨城新聞社長賞	(4名)
大好き いばらき 県民会議 理事長賞 (37名)	
小学校低学年の部	
小学校高学年の部	
中学校の部	
高等学校の部	

●茨城県知事賞

大すきなじいじのおこめ
茨城の農業について
金色のお米
茨城県と魅力的なロケ地

つくば市立島名小学校	2年	中村 嶺奈
龍ヶ崎市立八原小学校	6年	岩瀬 史絵
龍ヶ崎市立城ノ内中学校	3年	北澤 美優
茨城県立水戸第三高等学校	2年	安 玖瑠珠

●茨城県議会議長賞

ぼくの町は、こん虫かん
ぼくの夢
ようこそ、田舎体験へ
お盆の思い出

つくば市立光輝学園松代小学校	1年	稲垣 慶宥
古河市立古河第三小学校	5年	玉井 大聖
常陸太田市立水府中学校	1年	白石 実咲
茨城県立水戸第三高等学校	2年	藤田ありさ

●茨城県教育委員会教育長賞

茨城の鳥と水辺と自然が大好き
行方市から見た金魚すくいとは
わたしのふるさと～茨城～
支えられて、今・・・。

つくば市立二の宮小学校	3年	廣瀬 健伸
行方市立麻生小学校	6年	植田 笙太
稲敷市立新利根中学校	2年	酒井菜奈美
茨城県立水戸桜ノ牧高等学校常北校	3年	長井 綾乃

●茨城新聞社長賞

ぼくはほしいもでできている
最強のチームになるために
茨城県女性バス選手第一号の曾祖母
固定観念と現実

神栖市立波崎西小学校	1年	島田 結仁
水戸市立三の丸小学校	4年	菊本 陸王
かすみがうら市立霞ヶ浦中学校	2年	爲頭 李多
茨城県立下妻第一高等学校	2年	樋戸 芹菜

●大好き いばらき 県民会議 理事長賞

かわすみのちいさなおともだち
ぼくのじいじ
ほうきょう山大すき
たのしい木曜日
ずっとずっとつながるあさがお
水がいから学んだこと
わたしの家のい間
おはやし会に入って
おいしいお米
ぼくの大すきなピーマン
わたしの夢
ふるさと自慢
われらの斗利出小学校
水と大地とたくましい人々
私の大好きな家族
あこがれの保育士をめざして
ばあちゃん家 夏 つながる
ひいおじいさんのこと
大好きいばらき
全国一の茨城の農産物
バスケット家族と茨城
五百年の伝統を受け継ぐお祭り
私の好きな茨城
茨城の自然
あいさつでつながる
僕のふるさと
本当の友達
僕が英語を学ぶ理由
豊かな自然の茨城を未来へ
自分の地元は。
茨城の食べ物
守りたい、石岡のお祭り
茨城の防災を考える
茨城の爪
私の将来の夢
私の将来について
将来の夢

筑西市立竹島小学校	1年	市塚 大和
筑西市立新治小学校	1年	木下 佳彦
ひたちなか市立那珂湊第三小学校	2年	大塚 脩真
鹿嶋市立大同西小学校	2年	田島 雅史
茨城大学教育学部附属小学校	2年	園部亜唯彩
常総市立大生小学校	2年	片野 源志
ひたちなか市立平磯小学校	3年	軍司那奈葉
筑西市立新治小学校	3年	伊藤 慧人
龍ヶ崎市立八原小学校	3年	木野本 諒
神栖市立息栖小学校	3年	鈴木 洸星
ひたちなか市立那珂湊第三小学校	4年	高石 空奈
取手市立戸頭小学校	4年	森谷 夏羽
土浦市立斗利出小学校	4年	萩原 那南
阿見町立阿見小学校	5年	平野ミチル
水戸市立常磐小学校	5年	舛井 水姫
筑西市立大田小学校	5年	佐久間 柚風
桜川市立雨引小学校	5年	早瀬 大悟
阿見町立阿見小学校	6年	住谷 愛菜
龍ヶ崎市立八原小学校	6年	田邊 愛里
大洗町立大洗小学校	6年	岩城 凌空
常総市立石下中学校	1年	栗原 麻央
小美玉市立小川南中学校	1年	内山 楓
笠間市立岩間中学校	1年	菊田 侑奈
つくばみらい市立伊奈中学校	1年	松本 彩
茨城県立並木中等教育学校	2年	笹尾 優羽
つくばみらい市立小絹中学校	2年	中村 拓真
水戸市立国田義務教育学校	8年	田尻 夢麗
笠間市立笠間中学校	3年	高野 淑之
茨城町立明光中学校	3年	加藤 雄大
守谷市立守谷中学校	3年	浅川未奈実
茨城県立結城特別支援学校高等部	1年	池田 奈々
茨城県立中央高等学校	1年	谷口 結香
茨城県立友部高等学校	2年	小林 大起
水戸啓明高等学校	2年	駒木根帆純
茨城県立日立商業高等学校	2年	池崎奈々香
茨城県立岩瀬高等学校	2年	杉山 杏奈
茨城県立岩瀬高等学校	3年	園部ありさ

大すきなじいじのおこめ

つくば市立島名小学校 二年 中^{なか}村^{むら}嶺^れ奈^な

わたしのおじいちゃんはおこめを作っています。ぴかぴかごはんがわたしは大すきです。

でも、きよ年九月。じょうそうしにあるおじいちゃん家は水がいで田んぼもお家も水の中になってしまいました。「れな、もうすぐおいしいおこめがたべられるぞ。」とわらっていたおじいちゃんは、とてもかなしいかおでわたしは「じいじががんばって作ったおこめなのにどうしてこんないじわるをするの。」と本とうにかなしい気もちになりました。

わたしがよくあそびに行っていたおじいちゃんのお家はどろがいつぱいで、ちがうお家みたいでした。おじいちゃんもおばあちゃんも元気がなくなつて、わたしはどうしたらいいかわからなくなつてしまいました。

でも、それからおじいちゃんとおばあちゃんはとつてもがんばつて、またおこめを作ることになりました。春「おいしくなあれ」とまいたたねは元気に大きくなつて田んぼでもつと大きくなりました。九月になればいねかりです。わたしはお空へ「だからおねがい、お天気さん。もうあんなに雨をふらせないで。おいしいおこめができたよってじいじがよるこべるようにしてね。」とおねがいました。

どろだらけだったおにわにも今年もまたお花がさきました。おじいちゃんとおばあちゃんが水がいにまけないようにがんばったごほうびにさいてくれたのかなと思いました。

わたしはおじいちゃんとおばあちゃんがいるじょうそうしが大すきです。つくば山が見えて、田んぼがいつぱいあつて、その田んぼで作るおじいちゃんのおこめが大すきだからです。水がいにまけないでがんばるおじいちゃんのおこめはせかい一おいしいです。わたしもいやなことがあつてもすぐにやめないでがんばりつづけられるようにしたいです。じいじ、いつまでもおいしいおこめを作つてね。

茨城の農業について

龍ヶ崎市立八原小学校 六年 岩^{いわ}瀬^せ史^{ふみ}絵^え

茨城県は農業が盛んです。全国でも生産量一位の野菜や果物が多く、近所のスーパーマーケットでは茨城産のものが多く見られるので、私は茨城県の農業を誇りに思います。

しかし、最近農業の減少が問題となり、それに伴つて農産物の量も減っています。実際に私のおばあちゃんも、家で農業を営んでいたのですが、畑をやめてしまいました。やめてしまう人は「跡継ぎがないから」という理由が多いようです。

でも、これから農家の人がみんなやめていってしまったら、茨城県の米や野菜は無くなつてしまいます。だから跡継ぎを育てるか、自分で農業を始めなければなりません。だけどそ

ういう事を分かっている、出来ないのが実際の状況です。私は去年、社会の時間に茨城県の農業について勉強しました。農家が減っている現状や農業の大切さなどをしっかり学び、学習の最後にクラスで「将来農業をやりたい人」を聞かれたのですが、誰一人手を挙げませんでした。クラスのみならず、「農家は増えてほしいけど自分では…」と言っていて、私もそう思いました。こんな理由が増えて、農家は減っているんだ、と感じました。

私は茨城県の野菜や果物が好きなので、農家を増やして茨城県の農業をもっと盛んにしてほしいと思います。これからも、とつてもおいしい茨城県の農産物が豊富に作れるように県民として協力していきたいです。

では、具体的にはどうすればいいでしょうか。

茨城県はここ数年、都道府県の魅力度ランキングで最下位という残念な結果に終わっています。実際には首都圏に近く、海も山もあり、自然も豊かで食べ物もおいしいのにもかかわらずです。

以前、茨城県の最下位を伝えるニュースの中で、茨城県は農産物の生産高が全国有数の県である事を知らない人がとても多かった事に驚きました。

茨城県の豊かな自然に育まれたおいしい農産物をもっと上手に宣伝出来れば、農業に注目が集まるようになり、若い生産者もやりがいを感じられるのではないかと思います。

農業人口の底上げは簡単なことではないかもしれませんが、一歩ずつでも茨城県の未来のために前進する必要があります。

これからの茨城県の農業は、私達子供も真剣に考えていかなければならないと思いました。

金色のお米

龍ヶ崎市立城ノ内中学校 三年 北澤美優

親戚が集まった時などに「茨城って、これといったものはないよね」という言葉をよく耳にする。確かに自慢のできるレジャー施設はないかもしれない。

しかし、「レジャー施設だけが自慢できるものではない」と私は言いたい。我が故郷の茨城県には素敵な田園が広がっている。お米一粒一粒が金色のコートと地味な茶色の服の下に約六ヶ月かけて、私達に必要な栄養素をバランスよくため込んで私達の所にやってきてくれるのだ。

草木の若葉が鮮やかになる春には茶色の田んぼも新緑の色に変わり、夏には小さかった葉が大きくなり深緑へと成長する。秋には一斉にお辞儀をした立派な金色の稲穂に姿を変え、一年を通して四季折々の姿を見せてくれる。田起こし、代掻き、収穫の際には、トラクターやコンバインが白鷺を従えて一列に並んで田んぼを往來している姿。白い首をまっすぐ伸ばし立っている白鷺が大きくなった稲の中でかくれんぼをしているかの様な姿。どの季節の姿を見ても、私にとっては心和やかなるものばかりだ。

またお米は、そのもっちりとした真っ白な姿の中に炭水化物、タンパク質、カルシウム、鉄、マグネシウム、亜鉛、ビ

タミンB1、ビタミンB2、食物繊維など、他に類を見ないほどのバランスを備えている。

お米を取り入れた食生活は、お米自体に、体に必要な栄養素がバランスよく含まれている優れた食品であるという点に加えて、主食のお米に、おかずを組み合わせることで、更にバランスの取れたものになるというメリットがあることで、今、海外からも「ゴールデンバランス」とも言われるほどの注目を集めている。それは、お米を主食とした和食の特徴である「一汁三菜（ご飯に汁もの、主菜一品、副菜二品）」で構成された献立のことだ。まさに私達が幼い頃からの食べ慣れている毎日の食事なのだ。

日本の米どころで有名なのは、教科書でもよく取り上げられている新潟県・北海道・秋田県だが、平成二十七年の収穫量では全国七位、市場の占有率では八位。順位を見ても上位にしっかり食い込んでいるのは、我が故郷の茨城県である。（農林水産省「作物統計」参照）

「それ程でもないのでは？」と思われがちだが、関東地方では一番多く生産している。ちなみに、収穫量一位の新潟県の面積は、一二、五八四、一〇平方キロメートル。茨城県は、六、〇九七、〇六平方キロメートルである。（二〇一五年十月一日の国土交通省国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」参照）面積が新潟県の約半分にもかかわらず収穫量が多いのは、それだけ茨城県が豊かな証拠であると、私は思う。

しかし、今の茨城県では収穫量が多くとも消費量が少ないのが現状だ。野菜も、お米もやはり自分達の住んでいるところで作られたものが一番おいしいと、私は思う。それは身近

な場所で、身近な人達が丹精込めて作っている。そのことを感じながら食べることが出来るからだと思う。私は「安いら：」そんな基準で選ぶよりも、作っている人達、住んでいる所の味を大切に、地産地消を促進していきたい。そして、国内にも、国外にも茨城県のお米の良さと日本食の凄さを伝えていきたい。それに貢献できる様な大人に、私はなっていきたい。

茨城県と魅力的なロケ地

茨城県立水戸第三高等学校 二年

安

玖瑠珠

私は映画が好きである。映画には、たった二時間の短い時間に、心を動かすシーンがたくさん散りばめられている。毎日の変わらない生活が、映画館で映画を見ることによって、非日常的な刺激がある一日に変わることが映画の魅力である。

普段、映画を見ていると、「この感動的なシーンはどこで撮影されているのだろう。」とふと疑問に思うことがある。映画の撮影で使われているロケ地について調べてみると、茨城県が多く使われていることが分かった。

映画やテレビドラマなどのロケーション撮影を誘致し、屋外撮影がスムーズに行われるように支援する非営利組織のことを「フィルム・コミッション（FC）」という。このFCはもちろん茨城県にもある。さらに「日経エンタテインメント！」の各FCが過去五年間にロケを誘致した映画の作品数

を集計し、ランキング化した調査によると、茨城県が二位の沖縄県の五倍の数と大きく引き離し第一位となっている。

茨城県でロケが盛んな理由は主に三つある。一つ目は、様々なシーンが撮影できることだ。県内には、茨城空港やワープステーション江戸などのたくさんの施設があり、さらには山や海や湖などの大自然がたくさんある。そのため、時代劇から現代の作品まで様々なシーンに適應することができるのである。

二つ目は、映像制作会社が数多く集中している東京都から近距離にあるということだ。映画やドラマは、俳優さんや女優さんがいてこそその作品だ。その多忙な出演者が予定を合わせられなかったら作品は完成しない。その為には、移動時間が短く、東京に日帰りで帰れるということはとても重要である。また、近距離だとコストもかからない。移動にかかる費用もおさえられるし、日帰りで帰れる為、ホテル等にかかる費用も必要ないからだ。映画を作るスタッフはたくさんいる為、一日でも長引くと多大な費用がかかる。だから、ロケ地が東京から近いことは、ロケ地選びにとっても重要なことなのである。

三つ目は、茨城県は市町村と協力し、茨城県フィルムコミッション等協議会を設立していて、全県的な映画やドラマの撮影への協力体制が整っていることだ。県全体でこんなにも協力体制が構築されているのは、全国でも茨城県だけである。さらに茨城県ではエキストラも地域一帯で協力的である。また、いばらきフィルムコミッションでは「茨城を丸ごとお貸しします」をキャッチフレーズにし、幅広い撮影支援体制

を常に整えている。

このように、茨城県は映画やドラマのロケ地としても魅力的だと分かる。茨城県民は、地元で撮影される作品に出ること、自分の住んでいる場所を意識し、より知ることができる。そして、茨城県は素敵な場所だとより強く感じることがができる。また、ロケ地になることで茨城県に他県からロケ地をめぐる為に、観光に来る人もいる。そうすると、茨城県に活気が溢れ、県全体も活性化すると思う。

私はふと感じた疑問でロケ地に関することを調べたが、茨城がロケ地として多く使われることが、こんなに茨城県の活性化に繋がりにあることにとても驚いた。茨城県は周りからは魅力のない県だと言われている。たしかに個々に大きな魅力を持っているものは他の県に比べるとないかもしれない。しかし、ロケ地にも使われるような素敵な建物や風景などを見直してみると、他県の人からではわからない、私たち住んでいる県民にしかわからない魅力がたくさんあると感じる。そういう茨城県の隠れた魅力を他県の人にも、映画やドラマなどを通してでも気がついてくれたら嬉しいと思う。

ぼくの町は、こん虫かん

つくば市立光輝学園松代小学校 一年 稲垣慶宥

「わあきょうも、いっぱいいたね。」

ぼくの、まいにちのたのしみは、むしとり。いまは、カブトムシやクワガタのいるばしよは、いくつかあるけど、ひ、み、つ。

「おいしそうに、じゅえき、のんでるね。」

「はねがかわいてないから、うかしたてだ。」

「メスは、たまごうむから、そつとしとこ。」

まえは、いっぱいとれるだけ、とりたかったけど、いまは、かんさつしたら、もとのばしよに、にがしています。また、らいねんも、むしたちにあいたいからです。

まつしろには、たくさんのこうえんがあつて、いろんなしゅるいのいきものがあります。はるは、キジ、ウグイス、ヒバリ、オナガなどのやちようのこえが、にぎやかです。ガのようちゅうもいっぱいいて、カラフルです。めずらしいアカスジキンカメモシも、みつめました。あさみつけたときは、しろくろだったのに、ゆうがたには、あかとエメラルドいろにへんしんしていて、

「あつ、いろがかわつてる。」

といって、かぞくみんなで、おおさわぎしました。だから、

むしとりは、まいにちやつても、ぜんぜんあきません。まるで、たんけんみたいです。

きよねん、つくばにはじめてきたときは、さみしかったけど、いまは、このまつしろが、だいすきです。

「ずっと、ここにいたいなあ。」

だって、こんなにしせんが、ちかくにあるところは、めつたにないとおもうからです。むしずきのぼくには、おおきなこん虫かんみたいです。

「ようし、ぼくは、まつしろのファーブルになるぞ。」

ぼくの夢

古河市立古河第三小学校 五年 玉井大聖

ぼくの夢は、水泳選手になることです。理由は、二つあります。

一つ目は、ぼくが通っているスイミングスクールには、四百メートルフリーリレーで世界選手権の代表選手になったコーチがいて、スイミングのかべにメダルや写真などがかざつてあり、ぼくもいつか、世界のぶ台に立ちたいと憧れているからです。

二つ目は、四年生の秋から、平泳ぎのタイムが伸びてきて、もつと速くなりたいと思ったからです。

ぼくのせん門種目は、平泳ぎです。憧れている北島康介さんの大会での泳ぎは、録画して、何度も見ました。北島選手は、力強く、ダイナミックな泳ぎと、呼吸をした後、リ

カバリーからきれいなストリームラインで、まるでペンギンが、いきおい良く水中を泳ぐように、水中を伸びながら進むフォームが、とてもかっこいいです。ぼくは、少しでも北島選手の泳ぎに近づきたくて、まねをしてみたのですが、なかなか思うように進みません。

去年の冬に、コーチが、ぼく達のクラスを東京の大学に連れて行ってくれて、元オリンピック選手の寺川綾さんに会わせてくれました。やさしい寺川さんは、オリンピックでとった銅メダルを見せてくれました。ぼくは、重みのある銅メダルを持たせてもらい、どきどきしながら、寺川さんに質問しました。

「ライバルに勝つには、どうしたらいいですか。」

すると、寺川さんは、やさしい笑顔で、「勝ちぐせをつけるのよ。そのためには、弱い自分に勝つことよ。」と、アドバイスをしてくれました。ぼくは、この時の寺川さんの言葉を、今も忘れていません。

今年の八月の初めに、静岡県浜松市で開さいされたとびうお杯という学童の全国大会でぼくは、五十メートル、百メートル平泳ぎと二百メートルメドレーリレーの平泳ぎに出場しました。五十メートル、百メートル共に、ベストを出し、挑んだ二百メートルメドレーリレー決勝。速い六年生三人に混ぜてもらって決勝で泳げることが、ぼくは、嬉しくて仕方がありませんでした。いざスタートして、背泳ぎの選手が近づいてくるのを、コース台の上からワクワクしながら構えていると、観客席から、コーチやチームメイトが大きな声で、ぼくの名前を呼んでいるのが聞こえました。その時、オリン

ピックで泳ぐ北島選手のように、仲間から力をもらって、いつもよりもっと速く泳げる気がしました。飛び込むと、さらに気持ちが強くなつて、がむしゃらにぼくを待っている第三泳者のかべに向かつて突っこんでいきました。結果は、四位入賞、ぼくは、自己ベストを一秒上回りました。やりとげたそう快感とコーチ、仲間への感謝の気持ちを忘れずに、ぼくは、オリンピック選手になれるように、がんばります。

ようこそ、田舎体験へ

常陸太田市立水府中学校 一年 白石実咲

「はじめまして。よろしくお願ひします。」

それは、なまりのないきれいな声だった。

私の家と同じ敷地には、祖父母が暮らす母屋がある。そこに今年の七月下旬、元気な女子中学生が四人やって来た。私に住む常陸太田市では、教育旅行として田舎体験をする民泊という事業を行っている。この事業は、都会の小中学生を家庭で一晩または二晩預かり、ありのままの日常を共にすることで、田舎生活を体験してもらおうとする取り組みだ。

母屋での民泊の受け入れは二回目。今回は東京の江戸川区に住む中学生だった。東京というと、広いショッピングモールや高級マンションが立ち並んでいるのだろうなと私は思った。あこがれだが、あまりピンとはこない。

私は、午前中部活動だったので、途中から顔を合わせた。

私より一つ年上で、都会で暮らす中学生。初対面なので少し不安で緊張したが、すぐに仲良く話すことができた。

まずは、昼食作り。みんなで夏野菜たっぷりカレーを作った。最初に、なすやトマトなど新鮮な野菜を収穫するため、畑に行った。

「へえ。トマトが苗になっていっているのを初めて見た。こういう風になっているんだ。感激！」

とポツリと口にした子がいた。田舎体験をして、新たな事実を自ら発見することができたんだと思うと、何だか私はうれしくなった。収穫しながら彼女達は、水府の大自然に目を丸くしていた。トンボが肩に止まって悲鳴をあげたり、小さなカエルやてんとう虫が視界に入るだけで大騒ぎだった。私は思わず笑ってしまった。ここでの普通は、都会では普通じゃないんだ。同じ日本に住んでいるのにずいぶん差があることを知った瞬間だった。

夕食は、囲炉裏やかまどがある小屋で手打ちうどんをみんなで作った。生地作りは、初めてとは思えないほどの手つきだった。父の説明をよく聞いて、コツをつかんだのだ。私も、たまにうどんを打つので、いろいろアドバイスすることができた。出来上がったうどんは、四人とも個性豊かだった。きしめんのように平らだったり、極端に短かったり、団子だったり……。みんなで食卓を囲んで食べたのどごしの良いうどんは、彼女達の記憶に深く残ったことだろう。その証拠に、「家に帰ったら、絶対また作ります！」

と彼女達は笑顔で話してくれた。私は、会話の中で、みんなが東京デイズニールランドまで自転車であつた十五分という

ところに住んでいることを知り、とてもびっくりした。私なんて、中学校までも自転車で二十分はかかるというのに……。このことを思い出して、何度も驚く自分がいた。

次の日、私が部活動から帰ると、すぐに彼女達がニコニコしながら近寄ってきた。手には何かを優しく包んでいた。そつと中をのぞくと緑の小さな生き物が――。そう、カエルだ。昨日あんなにいやがっていたのに、平気で触って観察している姿を見て、私はうれしくてたまらなかった。思わず、満面の笑みで彼女達とハイタッチした。

私は、この民泊の受け入れを通して、いくつか感じたことがあった。まず、彼女達が今まで知らなかった田舎の日常を知ってくれたことがうれしかった。きつと、水府の良さを感じてくれたにちがいない。家に大きな畑があるなんて、作物を自分の手で育てることができると、周りが緑に囲まれているなんて、たくさんの生物や植物と共存しながら生きていけるなんて。私は、今まで普通だと思っていたことが何だか特別に思えてきた。私が住んでいるこの環境は、実はありがたくて大切にしなければならぬものなんだと改めて感じた。そして、この自然豊かな水府をもっと自慢したくなつた。自然あつてこそこの田舎生活。この素晴らしさを決して壊してはならない。私はこのことを次の世代にも伝えていきたい。

お盆の思い出

茨城県立水戸第三高等学校

二年

藤^{ふじ}

田^た

ありさ

今年の夏休み中の出来事です。家族で旅行に出掛けようという母の話に私はあまり乗り気ではありませんでした。行き先が県内だったからです。でも、留守番をしている訳にもいかなないので渋々車に乗り、奥久慈の知り合いの別荘へと向かいました。車中はしばらく見慣れた景色で飽きてしまい、いつの間にか眠ってしまいました。

「もうすぐ着くよ」という母の声で起こされ外は相変わらずの田舎の風景に、返事もせず不機嫌な態度をしてしまいました。

着いたところは、久慈川のすぐそばの自然に囲まれた場所でした。古民家風の割と新しい家はその場所に馴染んで、どこか遠くの知らない県へ来たように思えました。荷物を降ろし終えると久慈川の浅瀬へ向かいました。川はとてもきれいで底の石まで見えました。私はスポンを膝の上までまくり水の中へ足を入れました。水の冷たさが気持ち良くて汗が吹き飛んでいくのを感じました。五才年下の妹は水着になり無邪気に川で遊び始めたので、自分も水着を持ってくればよかったですと思いました。

川から上がり、近くのスーパーに夕飯の買い出しに行きました。母とスーパーへ行くのは久しぶりで、母は地元のお惣菜を選びカゴの中に入れていました。母は「地元の方が新鮮で美味しい」と言いながら、野菜に果物、お肉やアユを買い

ました。

夕飯は外でバーベキューをしました。母の言うとおりで、どれも新鮮で美味しく、アユは苦手でしたが奥久慈しゃもは感動的でした。私は食べながら、中学二年の時に出場したいばらきっ子郷土検定の大会で副知事が、「茨城には美味しい物がたくさんあり過ぎて一番にならない」と話していたのを思い出しました。副知事の言葉が今ならなんとなく分かる気がしました。

後片付けをして、車で温泉まで行きました。夏休み中ということもあり人であふれていて、ここが観光地で、旅行に来たんだという実感が湧きました。混み合っていました。温泉は少し熱めで、一日の疲れも洗い流すことができました。帰りの車の中で妹は眠ってしまい、母が布団へ運びました。私はまだ寝るには早いで持って来た課題をやり始めました。父に問題を出せと言われたので世界史の課題を出したりして、そこから話が広がり勉強の事、進路の事、自分の事、いろいろな話をしました。こんな風に両親と話をするのは初めてでした。日付も変わったので私も布団へ入りました。目を閉じてさっきの会話を考えていました。私が「子供でいられる時間」、一緒に出掛けたりできるのはあとどれくらいかと両親が話していました。考えていたら自然と眠くなり、眠っていました。

翌日は、袋田の滝を見に行きました。袋田の滝を見るのは二度目でしたが、一度目は小学生だった事もあり、あまり記憶がなかったのです。その迫力と美しさに驚きました。

「茨城も悪くない」自宅へと向かう車中では出発した時は考

えられない気持ちになっていました。この三日間で私の不機嫌もいつの間にか消えていました。

都会への憧れはもちろんあるけれど、少し不便な私の生まれ育った茨城のいろんな良さを改めて感じました。

高校を卒業して県外へ出るかもしれない、そう思ったら両親が話していた子供でいられる時間をもっと大切にしようと思いました。茨城県内の小さな旅行だったけれど、茨城を満喫できて、家族との思い出もできて、中身の詰まったいいものになりました。



茨城の鳥と水辺と自然が大好き

つくば市立二の宮小学校 三年 廣瀬健伸

ぼくが茨城県に住んでいて一番よかったと思うのは、バードウオツチングをしているときです。二年生の六月、土浦市宍塚でサシバという猛きんを見たのが、鳥にむ中になつたきっかけです。望遠鏡をのぞくと、え物を狙ってするどく光る目がよく見えました。かっこよくて、ドキドキしました。以来、休みはいつも鳥を見に行っています。

よく行くのは、稲しき市の霞ヶ浦周辺です。春や秋は、はす田にシギやチドリの間が何種類も来ます。シベリアではん殖して南の島で越冬する長いたびの途中で、羽を休めている鳥たちと知り、こんなかわいいのにすごいなと驚きました。妙技の鼻という所には、魚を食べる猛きんのミサゴもいます。大きなヨシ原には、オオヨシキリやセツカなどがいて、冬にはチュウヒというタカもやってきます。

真冬の二月には、オオワシを見たくて、初めて涸沼に行きました。ぼくよりずっと大きく、二メートルもある特別天然記念物です。涸沼のオオワシはおばあちゃんですが、口ばしがきれいなオレンジ色で、堂々と空をとんでいました。カモやハジロカイツブリの大群オオハチヨウにも会えました。

冬の終わりにはカモメの仲間も見なくなり、波崎港に通い、

ウミネコやセグロカモメ、カナダカモメなどを見ました。クワカモメという日本で一羽しか確認されていない種も波崎で見つかっています。いつか見たいです。

図かんを読むと、他にも珍しい鳥が茨城県でたくさん確認されています。まだいっていない県北の方も、見たことのないカモ類やヤマセミなどに会えるらしいので、楽しみです。

鳥のいる場所にはほぼ近くに水辺があり、水は命のみなもとなんだとわかりました。ぼくは、ゆたかな水辺の風景のなかで季節ごとにちがう鳥が見られる茨城県が大すきです。これから、もっと深く知りたいと思います。

行方市から見た金魚すくいとは

行方市立麻生小学校 六年 植田笙太

「わーい。お母さん見て、金魚とれたよ。」ぼくが初めて金魚をとったのは、四才の時、家の近くの熊野神社でやっていた大六天様のお祭りだった。

大六天様のお祭りは、男の人たちがみこしをかついで鳥並地区の人たちの家を、ホラ貝をふきながら一軒一軒回る。そして、家にみこしが来たら、「わっしょいわっしょい。」と男の人たちが力強くかついでくれる。そのみこしの下を、「一年間無病息災でいられますように」と願いながらその家の家族はくぐりぬける。

熊野神社は、鳥並地区を代表する文化財で、ぼくやおねえちゃんが初めてお宮参りに行った神社だ。また、去年亡く

なった歴史家のおじいちゃんが、「麻生の歴史」の調査のために、調べていた場所でもある。この祭りは、金魚すくいや、やきそば、ビンゴなど、ぼくたちが楽しみにしているお店がでる。地区の消防団の人達がやってくれるお店がならぶ。ぼくのお父さんも、消防団員のころに、やきそばを作ってくれたことがある。その祭りですった金魚は、今でも水そうで元気に生き続けている。

この前、テレビに出ている人が、「金魚なんかすぐ死んじやうよ。」と笑いながら言っていた。ぼくは、「うちの金魚はもう七年も生きています。テレビの人の言っていることはおかしいなあ」と思った。

「金魚すくい」と聞くと、ふつうの人は、「夏祭りでしかできないもの」と思うかもしれない。しかし行方市では、夏祭りだけでなく、ちゃんとした大会が開かれている。このあいだの大会では、三分間で四十四匹もすくって全国大会出場を決めた人もいます。昔から、日本人の中の一つの文化として親しまれている。

大会には、ルールがある。三分間で何匹すくえるか。たくさんすくうには、コツもある。いろいろあって、「シンク口すくい」、「尾びれはずし」、「回転水切り」、「三点すくい」、「リズムすくい」などがある。それらをうまくつかって、たぐさんの金魚をすくった人の勝ちだ。

また、ディスプレイセンターや、老人ホームにいる人たちも、車いすのままや、いすに座ったまま金魚すくいが楽しめる工夫もしているそう。脳の活性化にもよく、子どもからお年寄りまで楽しまれている。

そんな金魚すくいを、じゆくをつくって、ぼくたち子どもたちに教えたり、金魚すくい専用の場所をつくったりと、金魚すくいを広めようと努力している人たちもいる。そして、このすばらしい文化と、行方市の良さを全国へ広めるのは、このぼくたちの番だと感じた。

わたしのふるさと〜茨城〜

稲敷市立新利根中学校 二年 酒井 菜奈美

私の本棚には「石」が置いてあります。花こう岩です。五才の頃、笠間にある「石の百年館」でもらったからです。

私は小学校に入学する前に、四才年上の兄と一緒に「科学大好きスタンプラリー」に載っている五十の全ての施設に行きました。幼かった私には記憶がない施設もありますが、とても楽しい思い出も、たくさん残っています。

「石の博物館」にはたぐさんの石がありました。私が住んでいるこの稲敷市には田んぼが広がり、ゆったりと川が流れ、そしてその川から堆積してできた山はありますが、石が採れるような山はありません。

私の母は筑波山の麓で育ったそうで、この花こう岩を見ると「懐かしい」と言います。母にとって茨城は、石を切り出した山とその石を加工する石屋さんがあるのが当たり前の風景なのだそうです。母にとっては小学校、中学校と過ごしたその町がふるさとなのでしょう。でも、私の中にある茨城の風景は田んぼです。そして悠々と流れる利根川です。見渡す

限り地平線まで広がる水田。春の田植えから始まり、初夏の生き生きとした緑、そして秋の黄金色の波。私にとつてのふるさととは、この稲敷の風景なのだと思います。そう考えてみると、同じ茨城育ちでも、ふるさとの風景は人それぞれなのだと思えます。

スタンプラリーで行った花貫溪谷では、花貫自然センターを目指して歩いている時に、ミヤマクワガタを見つけました。コクワガタしか捕まえたことがなかった兄はとても喜んで家に持ち帰り、大切に飼っていました。私は平らなところしか歩いた事が無かったので、溪谷のごつごつした道と川の流れに驚きました。

プラトリーさしみでは風力発電の大きな風車に驚いていたら、アブに追いかけられて車に慌てて逃げ込んだり、花立山天文台では大きな望遠鏡をのぞかせてもらったりしました。潮騒はまなす公園の展望台から見た鹿島灘には大きな船が見えました。雪入ふれあいの里公園ではザリガニつりをして遊びました。

茨城県はとても広くて、毎週のように家族と車で出かけました。スタンプラリーを通して、茨城の山や海といった豊かな自然の風景をたくさん発見しました。

また、茨城県には最先端の技術もたくさんありました。つくば市のサイエンス・スクエアではアザラシ型のロボットを見ました。私は最初は本当に生きているのかな、と思ってしまいました。甘えてくる動作がとてもかわいいロボットでした。筑波宇宙センターではロケットを見て、宇宙って何だろう、と思ったことを覚えています。茨城には自然だけではな

く、「学園都市」という一面もあることも知りました。

私は茨城にはいろいろな顔があるということにも気付きました。同じ茨城県なのに北と南、海側と内陸側では全く風景が違います。だから、農産物もいろいろな物が出来るのです。たくさんのお恵みを受けて先祖たちが大切にしてきたこの茨城という大地。

私が大人になった時に一番に思い出す茨城の風景はどんなでしょう。そして、私達の子供や孫、子孫はどんな風景を見るのでしょうか。そう考えた時、私は幼い頃に家族で見たいろいろな風景を、この豊かな茨城の自然を大切にしなければいけない、そして自分の子供や孫にも見せてあげたいと思いました。そうやって受け継いでいくことが私達の役割なのだと思います。

「私のふるさととは茨城です。」

私はこれからも胸をはってこう言います。そのためにも、茨城の豊かな自然を守る、という気持ちを忘れないようにしたいと思います。

支えられて、今…。

茨城県立水戸桜ノ牧高等学校常北校 三年 なが長 い井 あや綾 乃

私が茨城に來たのは、四歳の時でした。それまでは、千葉の児童養護施設で生活していました。私と兄を引き取ってくれたのは、祖母の姉で、私の大叔母さんにあたる方と、そのご家族でした。大叔母さんの家が茨城にあると聞いた時、わ

ざわざ千葉まで私と兄を迎えに来てくれたのかと、とても驚きました。そして、そのことがとても嬉しかったです。

大叔母さんの家に行くと、私に兄姉が増えました。兄が一人から三人に増え、姉ができました。施設にいた時も、一緒に生活している皆が家族のようだったので寂しいなどとは思いませんでしたが、その施設でお姉さんのような立場だった私は、自分が甘えても良い存在ができたことがとても嬉しかったです。そして、大叔母さんに、

「私達のこととは家族だと思って、私達を、お母さん、お父さん、お兄ちゃん、お姉ちゃんと呼んでね。」

と言われて初めて、私に家族ができたのだと実感することができました。父の顔も知らず、母のこともうろ覚えで、温かい思い出が何一つない私には、普通の家庭など、夢ではないかと疑ってしまいました。恥ずかしい気持ちと不安が混じって、その場ではお母さんお父さんとは呼べませんでした。一緒に暮らしているうちに、自然と呼ぶようになりました。

茨城に来て、自然豊かな光景が、とても印象的でした。それまでは、あまり自然に触れる機会が無かったので尚更でした。家の近くに何本も生えている、梅の花がとても綺麗で、幼かった私は、毎年見ているだろう母に、梅の花がどんなに素敵か、一生懸命語っていました。すると母が、丁度時期だから、と言って、私を偕楽園に連れていってくれました。偕楽園では、梅まつりを開催していて、沢山の人で溢れかえっていました。その、初めて見る人の多さに最初は驚きましたが、慣れてくると、母の手を引いてあちこちと見て回りました。私が一番気に入ったのは、見晴らし広場から見る沢山の

梅と千波湖です。上から梅を見ることはなかなかないので、とても珍しく思いました。こんな素敵なお所に連れてきてもらえて、とても嬉しかったです。

梅の時期も終わり、幼稚園が始まる時期になりました。家族には慣れてきてはいましたが、家の外となるとまた別で、知っている人のいない環境はやはり、不安で仕方なかったです。スクールバスの地区集合場所に行くと、女の子が四人、男の子が二人いました。皆仲が良さそうで、話しかけても大丈夫なのか分からず、結局そこでは誰とも話せませんでした。もう少し積極的に行くべきだったかと落胆しながらバスに乗ると、隣に女の子が座ってきて驚きました。その子は集合場所にいた子でした。驚きで固まってる私に自己紹介をしよう、よろしく、と言われたので、吃りながらも私も自己紹介をしました。その日から、その子と行動を共にすることが多くなりました。園に慣れて、友人が増えても、バスを待つ時間やバスの中で遊んだりしていました。小学校も中学校も一緒に、クラスも部活も別々だったけれど、帰りは自然と一緒にいることが多かったです。他の友人と話す時は少なからず気を遣うこともあって、一人になりたいと思うことがあるけれど、その子と一緒にいる時は、何故か疲れたりせず、むしろ安心感を得ることが多々ありました。無理をしなくてもいい存在だったので、別々の高校に進学することが決まっても、会う機会が少なくなることに、とても不安を覚えました。親にも相談できないことや些細なことまで話せていた相手がいなくなるのは、私にとっては目隠しをして綱渡りをするようなものだったからです。支えが無いと立てない程弱くはない

つもりですが、信頼できる人と離れて、知らない人だらけの高校に通うことに、不安と焦りがありました。ですが、今度は自分から話しかけることができました。その子は明るく社交的な性格の子で話しやすく、お互いに知り合いがいないう、心細い状況だったこともあり、すぐに打ちとけることができました。心に少し余裕ができると、周りを見ることができるようになりました。校内の雰囲気も良く、先生方も丁寧に接してくださるので、学校はとても良い環境でした。そして城里町も自然が沢山あり、のどかな風景がとても心癒されるものだということにも気付くことができました。この高校に入學して本当に良かったと心から思いました。幼稚園からの友人とは今でも互いの悩みを打ち明けたり、他愛のない話で盛り上がりたりしています。私が今こうして笑っているのも、茨城で引き取ってくれた母のおかげだと思っっているので、就職したら、家から会社まで通いながら、身体の悪い母を支えたいと思っています。



ぼくはほしいもでできている

神栖市立波崎西小学校 一年 島田結仁

「ゆいとのからだは、ほしいもでできているんだよ。」
あるとき、おかあさんがいった。

ぼくがおかあさんのおなかにいたとき、おかあさんはいつもきもちがわるくて、なにもたべられないひがつづいたんだって。それで、いつきに七キロもやせてしまったときだよ。

そんなおかあさんをしんぱいしたおばあちゃんが、たべてごらんとよいしてくれたのがほしいもだった。

おかあさんは、ほしいもならたべられたようで、まいにちまいにちほしいもだけをたべてせいかつしたよ。ちよつとかわいそう。のどがかわかなかったかきいたら、おみずはのめたんだって。よかった。

それで生まれたのが、このぼくだ。ほしいもだけで、よくぼくはけんこうにうまれたなとふしぎにおもう。そこで、ほしいもはどんなえいようがあるのか、おかあさんといっしょにしらべてみた。

すると、ほしいもはさいきょうのたべものだということがわかった。うんちがよくでるしよくもつせい、みかんの二ばいのビタミンB1。レモンの二ばいのビタミンCに、むく

みをとってくれるカリウムもたくさんふくまれているんだって。すごいな！

もしかしたら、おばあちゃんはそのことをしっていて、おかあさんにほしいもをすすめたのかもしれないね。

なんだかほしいもがたべたくなってきた。うちのれいとうこには、ほしいもがある。ひいおばあちゃんのうちでづくりにしている、いつたべてもさいこうにおいしいほしいもだ。

「こんばんのこんだては、ほしいものてんぷらにしよう。」
カチカチだったほしいもは、まわりがカリカリのあまーいあまーいほしいもにへんしんした。

最強のチームになるために

水戸市立三の丸小学校 四年 菊本陸王

ぼくは家族というチームの一員だ。ぼくの他に、お父さん、お母さん、小学一年生の弟がメンバーだ。

ぼくと弟は、サッカーが大好きで、クラブチームに所ぞくしている。休みのたびにお父さんは、ぼくたちとサッカーの練習や、ランニングをしてくれる。ぼくたちが上手になって、試合にフル出場できる体力をつけるためだ。

お父さんとの練習は、楽しいというより、きびしい。だから、弟は泣いてしまうことが多い。ぼくは、たまにだ。そこでお母さんが登場する。ニッコリ笑ってなみだとあせをふきながら

「だいじょうぶ。がんばろうね。」

とおまじないをかけてくれるのだ。そうされると、ぼくたちは元氣と勇氣がわいてくる。どうしてだろう。

そんなお母さんが、夏休みに十日間入院した。前から決まっていたことだし、命にかかわることではないけれど、そんなにはなれて生活したこともないし、はっきり言って不安だ。弟へのおまじない担当もぼくになる。泣いたり、さみしがったりしてはいけないと思う。

キャプテンのお父さんは、ぼくたちに洗たくをたたむことや、お風呂そうじの指示をだした。ぼくは副キャプテンになったつもりで、弟のフォローや、指示以外の家事を探して手伝った。弟はお母さんのことを思い出して泣くかと思っただけれど、ニコニコしながらタオルをたたんでいる。弟が笑っている、ぼくの心も温かくなった。ぼくのおまじないがきいたんだ。

色々な気持ちをガマンして、がんばっていたら、お母さんがたい院する前の日に、ぼくは熱をだしてしまった。お母さんのおまじないを思い出しながら、フトンの中でこっそり泣いた。やっぱり家族みんなと一緒にいたい。マネージャー役のお母さんは、ぼくたちを応援しながら、どんな気持ちだったのだろう。

そんなことを考えていたら、朝になって、お母さんが帰ってきた。ぼくは副キャプテンとして、おまじないをかけた。「おかえりなさい。だいじょうぶだよ。これからみんながんばろうね。」

お母さんはとてもうれしそうな顔をしていた。ぼくたち家族は、四人のチームだ。だれかがいないとうま

くパスがまわらない。自分のことだけを考えていてもダメだ。お父さんとお母さんは、いつもチームのことを考えて行動していた。弟の笑顔が、ぼくのささえにもなっていた。だから、ぼくはがんばれた。副キャプテンになって、はじめて気がついた。みんなすごいと思う。

ぼくはこのチームが大好きだ。チームのために、これからも色々なこと、ちょう戦したい。それがぼくの感しゃのしるしだ。

茨城県女性バス運転手第二号の曾祖母

かすみがうら市立霞ヶ浦中学校 二年 爲頭 李多

私の曾祖母、つまりひいばあは、バスの運転手でした。昭和四年に茨城県初の女性バス運転手が、土浦市に存在していたのです。現在でもバスやタクシーの女性運転手は、少なく珍しい存在です。

そんな仕事をしていたひいばあのことをもっと知りたいと思ひ、この夏祖母に、ひいばあについてたずねました。祖母の母親がひいばあです。

祖母はひいばあの中の当時の運転免許証と一本のカセットテープを見せてくれました。カセットテープには、昭和五十五年のラジオのインタビューが記録されており、六十九歳のひいばあの声がきくことができました。バスドライバーとして働いていた当時の昭和初期の様子や自分の体験を話していました。馬車がまだ走っていて、道をゆずり合って通行していた

ことや、米國フォード社のT型バスを運転していたこと、その車が故障しやすかったこと。それから、乗降がどこでも自由にできた区間では、急な雨のときに、顔見知りの学生さんを料金をもらわずに乗せてあげたこともあったと、恥ずかしがりながら話す声も入っていました。その声を聞いて、私はひいばあの優しさを感じ、微笑んでしまいました。

しかし、苦勞した話もありました。ひいばあは六歳で父親を亡くし、母親と二人暮らしで育ちました。母親が苦勞して自分を養う姿を見て、職業婦人として働かなくてはと決意したのではないかと思えます。

そして、これは祖母が教えてくれたことです。ひいばあは東京で暮らしていて一九二三年（大正十二年）九月一日、ひいばあが、十二歳の時、関東大震災に遭い、親子ともに命は助かりましたが、さぬきまでぐちゃぐちゃの常磐線の線路を、明日どうなるかも分からぬまま、約六十キロもの距離を親子で励まし合いながら歩き、土浦に辿りついたそうです。

ひいばあはインタビューで、生活のこともいろいろ考えて、十九歳で免許を取ったと言っていました。土浦での暮らしても、母親の苦勞している姿を目にしていたのだと思いません。

父は、自分の祖母であるひいばああの免許証を見て、「そういえば、ばあちゃん、免許をとるのに、車をバラバラにして組み立てられるようになるまで練習したなんていつてたな。」

と、教えてくれました。

バスの運転手だったひいばあを、すごい！かっこいい！と

思いますが、その職に就くまでの苦勞は、私の想像をはるかに超えるものでしょう。

母は、ひいばあが、伝説の女性運転手だということを証明する実体験を教えてくださいました。二年前、母が宅配業者で荷受けの仕事をしていたら、荷物を出しにきたおじいさんが、「爲頭さん？あの土浦の爲頭さんかい？あのおばあちゃんが、バスの運転手やってた爲頭さんかい。なー。がんばり屋のなー。」

と、言ったそうです。これを聞いて、平成のこの時にひいばあを知っている人がいるなんて！ひいばあもつと話をしておきたかったと思ったそうです。私も母のこの話を聞いてとても驚きました。しかし、もうひいばあとお話をすることはできません。ひいばあは既に九年前に他界しています。でも、時々ひいばあのことを思い出したりします。今回の話もそのきっかけとなりました。

六歳で父を亡くしてからの生活、被災、資格取得など、多くの様々な苦勞を乗り越えてきた伝説は、将来待ち受ける困難に立ち向かう時、どんな応援の言葉よりも私を励ましてくれると思えます。

固定観念と現実

茨城県立下妻第一高等学校 二年

檜 戸 芹 菜

「エジプトのピラミッド」の周りにはどんな風景が広がっていると思いますか。きっと多くの人が、砂漠にぽつんと建っているピラミッドを想像するでしょう。しかし、実際には、ピラミッドから少し歩くと、そこにはカイロの街が広がっているそうです。

昨年九月、鬼怒川が決壊し、常総市を中心に、沢山の方々が被害を受けました。テレビから流れてくる映像や、友達が避難生活を送っている現実にとっても心が痛めつけられました。そして、県外からの援助の車両や、被災地でボランティアを行っている友達をみると、近くにいるのに何も出来ない自分が本当に惨めでした。

それから数ヶ月が経った頃、ある広告を見つけました。その広告には、「カンボジアでボランティアをしよう！」と書かれていました。七年前、私は、カンボジアの存在と実態を初めて知りました。当時、小学生だった私は、それが現実だと受け入れることが出来ず、

「いつかカンボジアへ行つて、自分の目で確かめよう。」と、心に決めていました。だから、その広告をみて、行く決心をしました。

そして、昨春、私はカンボジアへ足を踏み入れました。約一週間滞在し、そのうちの二日間、村の小学校を訪れ、カンボジアにはない音楽の授業を行うことになっていました。ホ

テルから約一時間かけ、小学校へ向かいました。小学校に到着すると、全校生徒が花道をつくり、私達を歓迎してくれました。授業では、日本から持って行った楽器の紹介や、リズムをとったり、鍵盤ハーモニカの練習をしたりしました。生徒達は、音一音一音に目を輝かせていました。

自由時間になると、生徒達は、走って私達を誘いに来てくれました。「僕は、国を守りたいから、兵隊になりたいんだ。」
「私は、学校の先生になりたい。」と、絵で夢を教えてください、カンボジアの正月の遊びで、幸せになれるといわれている粉を付け合ったりしました。子供達の笑顔は、とても無邪気で、その笑顔に沢山の勇気をもらいました。そして、私のカンボジアに対するイメージも百八十度変わろうとしていました。しかし、気付けば、子供達の笑顔に、心の底から笑えない自分がいました。視線を下に向けると、子供達の服や体は、砂まみれで、靴は覆いていない子供がほとんどだったのです。

今、カンボジアでは、都市部と地方との貧富の差だけでなく、教育の質も問題となっています。実際、私が訪れた小学校は、生徒三百人に対し、特別な資格を所持していない教師が七人というのが現実でした。更に、小学校は二部制で、子供達は家へ帰ると、家族のために仕事を手伝います。仕事が忙しいと、学校に来ることが難しく、進級テストに合格できず、年齢通りに進級できない子供達も大勢います。カンボジアの子供達は、遊んだ時に付着してしまった砂や粉を落とすてくれたり、別れの時には、涙を拭いてくれたり、とても優しい心を持っています。それにも関わらず、「どうしてあんな

なに貧しい生活を送らなければならぬのだろう。いつか、この子供達を救いたい。」そんな思いが次第に強くなってきました。

現地へ行って、分かったことがあります。発展途上国の人々が一番必要としているものは何だと思えますか。おそらく、多くの人が「お金」だと考えていると思います。しかし、発展途上国にとって、最も必要な物は、実は「お金」ではなく、「技術」なのです。先進国は、積極的に資金協力を行っています。発展途上国では、その資金が無駄遣いされてしまうことが少なくありません。例えば、井戸の老朽化に伴い、直そうとしても、修理の仕方がわからず、井戸の中で菌が繁殖してしまい、結果的に、その井戸の水を飲んだ人の死を招いてしまうことがあるのが現実です。

このような現状を変えるためには、現地の人々に様々な技術を伝授することが必要です。

だから、私は将来、発展途上国へ赴き、その国の人々が安心し、豊かな生活を送ることができるよう活動をしようと思えます。そして、その経験から、発展途上国のことを多くの人々に伝えたいです。

私達は、普段、平気で食べ物を残したり、まだ使える物を捨てたりしてしまいます。発展途上国の現状を多くの人が理解することができれば、物を大切にする人が増えるはず。また、どんな国にも良い所があります。それを私だけが知っている、世間には、発展途上国の悪いイメージだけが流布しているのは、不相应な気がします。

発展途上国には、まだ誰も知らない光の芽が存在している

はず。それを見つけ出し、輝かせられる、太陽のような存在に、私はなりたいです。私には、発展途上国の未来が光であふれているのがみえています。



かわすみのちいさなおともだち

筑西市立竹島小学校 一年 市塚大和

ぼくのちいさなおともだちとは、ぼくよりもせのちいさいがっこうのともだちのことではありません。ぼくよりもとしたのようちえんせいのことでもありません。

ぼくといっしょに、かわすみにすんでいるいきものたちのことです。それではいくつかのたのしいともだちをしようかします。

まずさいしょにともだちになったのは、とらんぼりんのかえるです。こいつはきれいなみどりいろでびよんぴよんげんきにはねていてとてもだいすきです。

つぎはわがやのがあどまんのやもりです。よるになるとまどにきてくれてがをたべてくれますが、はずかしがりやさんですぐにげます。かたちがかっこよくてだいすきです。

そしてみずのなかのせんしのざりがにです。まっかでおおきくてかっこよくてだいすきです。ただおこりんぼうがたまにきずです。

さいごにさんぐらすとんぼです。おとうさんがいつもかけているさんぐらすのようなかおをしています。きいろやみずいろ、みどりとからふるでおしゃれなともだちです。とくにかわとんぼはきれいでだいすきです。

このようにかわすみにはたくさんのおちいさなおともだちがいます。

ただそれでもむかしとくらべるとだいぶいきものがへつたとじいちゃんがいってしまいました。むかしはきんじよのなやにきつねがすをつくっていたり、わしがとんでいたり、なつによるにはほたるがたくさんとんでいてきれいだったといっていました。いまではみんなくなつたときいて、ぼくはさびしいきもちになりました。

ぼくはかわすみのちいさなおともだちたちがだいすきだし、ずっといっしょにいたいのです。だから、かわすみのしぜんをたいせつにのこしていくにはなにがひつようかこれからがんばってべんきょうしていこうとおもいます。

ぼくのじいじ

筑西市立新治小学校 一年 木下佳彦

「一ぴき、いたぞ。」と、じいじがいった。

「やったー、いた。」と、ぼくがいった。

「ほんとう？ やったー。」と、おとうとのともがいった。まいと、なつにはかぶとむしをとりにいくのが、ぼくのたのしみになってます。そんなとき、ぼくのじいじは、かぶとむしとりのめいじんへんしんします。かぶとむしがどこにいるのか、ぼくやともにおしえてくれたり、かんとんにかぶとむしをつかまえてくれたりします。ぼくは、(じいじつてすごいな。)とおもいます。ことしのなつもじいじが、かぶと

むしやくわがたむしをたくさんつかまえてくれました。だから、ともとぼくのみしかごはいっぱいです。とものかぶとむしと、ぼくのかぶとむしでなんかいもたたかわせてあそびました。らいねんのなつもしじいとかぶとむしとりいききたいなどおもいました。

また、あるひ、じいじがぼくに、すごいプレゼントをくれました。ぼくがともと、にわであそんでいると、てつぼうがとどいたのです。ぼくは、びっくりしました。すると、じいじが、

「よしひこは、さかあがりができないから、これでれんしゅうしてごらん。」

と、いいました。さいしよは、(やりたくないな)とおもいました。けれど、じいじがせつかくかってくれたので、がんばろうとおもいました。しばらくは、なんかいやつてもできなくて、いやになることもたびたびでした。ところが、八がつ一にち、さかあがりができるようになったのです。ぼくは、とてもうれしくて、なんかいもやりました。じいじも、すぐくよろこんでくれました。

ぼくは、じいじがいてくれてよかったです。これからも、じいじが、げんきでながいきしてくれるとうれしいです。

ほうきょう山大すき

ひたちなか市立那珂湊第三小学校 二年 おお大塚 しゅう脩真

七月二十三日に、かぞくとおとうさんのともだちと五人で、ほうきょう山へ山のほりに行きました。ほうきょう山はつくば山のとなりにあります。夏だけど、天気はくもりです。こしさむかったです。

のほりはじめは、田んぼみちでした。ビューとすこしつよい風がふきました。みどり色の田んぼのいねが、海のなみみに、ボコンボコンしてました。おもしろいなと思いました。歩いてみると、先が二つにわかれた中くらいの足あとを見つけました。イノシシの足あとだと思いました。

山の中に入っていくと、鳥たちがなっていました。ぼくにはうたっているように聞こえました。小えだをひろって、森のしきしゃになってみました。ぼくがしきをやってたら、鳥たちが大きなこえでうたっているようにかんじました。うれしくなりました。川もいつのまにかうたっていました。ザアザアとうたっていました。ぼくはもつとたのしくなりました。

石がゴロゴロしていて、木のねっこだらけのけわしいさかみちをのぼっていきました。石コロの上に、どうぶつのフンがありました。だれのフンかなと思いました。

ちよう上についたら、けしきがよかったです。となりのつくば山やかすみがうらも見えました。

ぼくは、ほいく園の時からほうきょう山にのぼっているの

で、ほうきよう山が大すきです。鳥や川のうたを聞きに、またのほりにいきたいです。

たのしい木曜日

鹿嶋市立大同西小学校 二年 田 島 雅 史

今日は木曜日。週に一どのとくべつな日。おとうさんと、ぼくたちできめた「ノーメディアデー。」

あさ、目がさめたときから、一日のすごしかたがちがう。読書がすきなおにいちちゃんとおねえちゃん、いろいろな本を読んでいる。ぼくもこくごの本や、かいけつゾロリなどを読んでいる。

テレビの音がしないと、本にしゅう中できることに気がついた。そして、前よりもそとでサッカーをしたり、自てん車にのってあそぶことが多くなった。おにいちちゃんやおねえちゃんは、トランプやじんせいゲームであそんでくれる。一人でテレビやDVDをみているよりも、たのしい時間がふえたと思う。

さいしよは、どうしてノーメディアデーなんてつくるのだろうと思った。おにいちちゃんたちは、けいたいでんわやゲームがつかえず、つまらなさそうだった。ぼくは、DVDやテレビがみられないのがざんねんだった。

テレビをつけないことで、かぞくの会話もふえたと思う。学校であったことなどおにいちちゃんおねえちゃんの話を書くのもおもしろい。きょうだいみんなで、いっしょにいるのも

いいなと思った。

おとうさんは、よく

「テレビをみて、ボーツとしているんじゃないやありません。」と言う。

テレビやDVDは、えいぞうをみていれればいい。何も考えなくても時間だけがすぎていく。だから、なんとなくテレビをつけてしまうのかもしれない。

ノーメディアデーによって、時間のつかいかたを考えるようになった。えいぞうばかりにたよらず、自分の考えをしつかりもてる人になりたい。そのためにも、たくさんの本を読んできこうと思う。

ずっとずっとつながるあさがお

茨城大学教育学部附属小学校 二年 園 部 亜唯彩

わたしの小学校では、まい年、一年生があさがおをそだてています。

わたしが一年生の時、二年生がひらいてくれた「あさがおおゆずり会」で、あさがおのたねと、あさがおブックをもらいました。あさがおブックには、

「このあさがおのたねは、今の三年生からおくられてずっとつながっているあさがおです。だから、大切にそだててつぎの一年生にちゃんとわたしててください。」

わたしは、

「ずっとつながっているあさがおだから、つぎの一年生に、ちゃんとわたすぞ。」

と、わたくしの心のまほうのかけらをあさがおにふりかけてそだてました。たねをとった時、ふりかけたまほうのかけらが、たねにいっぱいつまっていて、かけらがあふれそうな大きなたねでした。わたしは、新しい一年生にたねをあげるのをたのしみにして、ずっとずっとまっています。

そして、二年生になって、一年生のりいなちゃんに、あさがおのたねをゆずりました。わたしは、りいなちゃんのあさがおがさくまでに、一年生のベランダになんどもなんども見に行きました。

「めがでるかな。どんなあさがおがさくかな。」

と思いながら、心がわくわくするような気もちでした。

「あつ、きれいなあさがおがさいたぞ。」

りいなちゃんのあさがおがさきました。初めてさいたりいなちゃんのあさがおは、ぶどう色で、太ようの光をいっぱいあびてきらきら光っているにこにこえがおのあさがおでした。

これからできるりいなちゃんのあさがおのたねには、わたしが一年生の時にかけたまほうのかけれが一緒に入っています。だから、ずっとずっとあさがおはつながっています。

水がいから学んだこと

常総市立天生小学校 二年 片野源志

ぼくたちのすんでいるじょうそうしは、きよ年、大きな水がいにおそわれました。その時に思ったことが二つあります。一つ目は、みんなでたすけあうことの大せつさです。ぼくの家は、きゅうげきにふえた水にかこまれてしまって、ひなでなくなってしまうました。けれど、こまっていたらじえいたいの人たちや、ぼくのしんせきの人たちが心ばいして、家に来てくれました。足りなくなつたたべものや、のみものをもつてきてくれて、うれしかったし、ほんとうにたすかりました。あるときぼくは、みんなにたすけてもらつてうれしかったので、こんどは、こまっている人がいたら、ぼくがたすけてあげたいと思います。それがたすけあいなんだとかかんじることができました。

二つ目は、ぼうさいむせんやじょうほうをいしきして生活することです。ぼくは今まで、外でなっているぼうさいむせんは、ほんとうにひつようなのかなと思っていました。だけど、水がいの時に、お母さんがぼうさいむせんをよく聞いているすがたを見て、これをひつようとしている人はたくさんいるんだなと思いました。水がいいこう、ぼくは、学校のほうそうや外でなっているぼうさいむせんを今までよりもしっかり聞くようになりました。

ぼくは、この水がいをけいけんして、とてもこわい思いもしましたが、みんながたすけてくれたり、ぼくたちのために

楽しい行じをもよおしてくれたりしたので、つらい思いはだ
いぶなくなりました。

こまったときは、みんなでたすけあうことや、大せつなほ
うさいむせんをよく聞くといいことは、これからもわすれな
いでほかの人にもつたえていきたいです。そして、もう二ど
と、このようなことがおこらないように、みんなできよう力
して、大すきないばらきけんを、もつとすみやすくしてい
きたいです。

わたしの家のい間ま

ひたちなか市立平磯小学校 三年 軍ぐん 司じ 那奈葉ななは

わたしの家のい間まは朝から夜までずっとにぎやかです。
朝はお母さんの声が一番ひびきます。

「早く起きて！学校におくれるよ。」

昼間、わたしは学校にいたのでわからないけれど、きつと
おばあちゃんがけらけらわらっていると思います。

夜は、おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、
お姉ちゃん、わたしで、ご飯を食べたり、話したりするので、
楽しくなってわたしの声が一番大きくひびきます。

たまにお父さんとお母さんがけんかをしてうるさい時ときもあ
ります。わたしとお姉ちゃんもけんかをしてうるさい時ときもあ
ります。

こんな風ふうにい間まはいつも音がしています。

ある日、い間までお母さんにおこられて、自分の部屋に一人

でいたことがありました。少ししたらさびしくなりました。
シーンとしていて音がないのでちよつとこわくなりました。
い間まにいる家族のことが気になりました。自分の部屋にいれ
ば、ゲームもたくさんできるし、宿題をしなくてもおこられ
ないし自由だけど、やっぱりい間まにいて、家族のみんなとい
た方がわたしは、好きです。

い間まにいれば、お母さんにおこられても、おじいちゃんが
なぐさめてくれます。いやな事があっても、い間まにいればだ
れかがわたしの話を聞いてくれます。家族が話しているのも
聞こえます。

おじいちゃんが言いました。

「い間まにいと、あつたかい気持ちになるだろ。」

本当にそうだなと思いました。心があつたかい感じが分か
る気がしました。明るい感じがしました。

わたしはこれからも家族とい間まにいる時間を大切にしたい
と思います。

おはやし会に入つて

筑西市立新治小学校 三年 伊い 藤とう 慧けい 人と

多くの住んでいる門井下には、「門井下おはやし会」とい
う会があります。毎年、七月に行われるお祭りまつりで、太こや笛
をえんそうします。友達の晴太君は小さいころからおはやし
会に入っています。晴太君がさそってくれたので、ほくも今
年から入りました。

おはやしの先生は、ぼくのじいちゃんの友達です。きびしいところもあるけれど、よくできるとたくさんほめてくれます。お祭りまで五回しか練習がありません。先生は、

「慧ちゃん、がんばって練習するんだ。お祭りの日にデビューだからね。」

と言って、かっこいい衣しよをかしてくれました。ぼくはワクワクしました。

「太こは、真ん中をななめからたたたくんだよ。」と先生に教わりましたが、なかなかうまくたたけません。ばちの持ち方もむずかしくて、自分の指をたたいてしまいました。ぼくが痛がっていると、中学生や高校生の先ばい達が、

「大丈夫。さいしょはできなくてもやればできるようになるから。がんばってやろう。」

とはげましてくれました。痛くてやりたくないと思っただけで、先ばいの言葉を思い出しながらがんばって練習しました。

お祭りの日、門井神社からみこしとだしが発射します。先生が、

「慧ちゃん、出発の前に太こたたけよ。」

と言いました。いよいよデビューです。ぼくは心ぞうがドキドキしました。先生や先ばい達がそれ！と合図をしてくれました。ぼくはまちがえずにたたくことができました。地いきの人達もはく手をしてくれました。とてもうれしかったです。

太この練習をして分かった事は、おはやしの上手な先ばい達も小さいころからたくさん練習をして上手になったんだという事です。先生や先ばい達に教わりながら、来年はもっと上手に太こをたたけるようになります。

おいしいお米

龍ヶ崎市立八原小学校 三年 木野本きのもと 諒りょう

ぼくのおばあちゃんの家では、お米を作っています。ぼくは、ようち園のときからおてつだいをしています。

まず、お米を作るためになえを田んぼに植えます。お父さんがきかいでなえを植えます。植えられてないところをぼくが田んぼに入って手で植えました。ざりがに、はさまれそうになりながら、あなを少しほり、そこになえを五本ぐらい取って植えて土をかぶせます。

それからおばあちゃんちに行くたびに田んぼのようすを見ます。少しずつ大きくなっていききました。ほが出て秋になるとしゅうかくできます。いねかりしてもらったあとにかんそうさせてもみすりさぎょうをします。もみすりさぎょうで出たもみがらを田んぼにまくさぎょうもてつだいます。このもみからは手や足につくとすぐクククします。もみながら取れてげんまいになります。できたげんまいをせいまいきでせいまいしてはくまいになります。そのはくまいをすいはんきでたくとおいしいごはんができてあがります。

自分で手つだいをしたからお米のせい長がよく分かりました。春に田植えをして秋にしゅうかくするまで水のかんりをしたり、田んぼのまわりを草かりしたり、しゅうかくが終わったら春までに何回も田んぼをたがやしたり、お米作りはともたいへんです。そのお米が今の日本では食べるりょうがへっていて、作る人もへっているとお父さんが教えてくれ

ました。

ぼくは、お米が大すきです。毎日のこさず大切に食べています。ぼくは大人になってもお米を作りつづけたいと思っています。そして、みんなにもいばきけんのとつてもおいしいお米を毎日もつとたくさん食べてほしいです。

ぼくの大すきなピーマン

神栖市立息栖小学校 三年 鈴木 洸 星

ぼくは、いばらきの食べ物の中でも、神栖市にすんでいるので、神栖市名さんのピーマンが大大すきです。

ぼくはピーマンをたくさん食べますが、スーパーで買っているのではなく、おじいちゃんが作ってくれています。おじいちゃんはピーマンがきれいですが、ぼくがいっぱい食べるので、いっぱい作ってくれます。

どうしてぼくがこんなにピーマンがすきかというところ、小さいころはお肉がきらいで野菜ばかり食べていました。お母さんが工夫して色々な野菜料理を作ってくれ、その中でも特にピーマンが大すきになっていたので。

お母さんのピーマン料理はたくさんあります。ホイコーロー、やきびたし、ピーマンの肉づめなどです。なかでも一番すきなのが、ピーマンのおひたしです。ピーマンを細く千切りにして、サツとゆでただけだそうです。だけど、かつおぶしとしょうゆをかけて食べるといくらでも食べられてしまいます。ピーマンを千切りするときは、ほうちょうがよく切

れないとうまく切れないそうで、お母さんはほうちょうをといてから千切りしています。

ぼくは、ゴーヤの苦みはきらいだけど、ピーマンの苦みはおいしく感じます。ゴーヤの苦みは、オエツとなってしまいます。ピーマンを食べている時に、「どうしてピーマンの苦みはおいしく感じるんだろう？」とか、「ピーマンとゴーヤってどっちが苦いのかなあ？」と考えながら食べています。お母さんにその話をすると、「ピーマンが苦くなりくい工夫をしてるんだよ。」と教えてくれました。ピーマンを横にきると苦みが出にくいのだそうです。

こんな風に工夫して料理をしてみて、ピーマンは苦いからきらいな人やぼくのおじいちゃんにも、ぼくの大すきなピーマンをすきになってもらいたいです。

わたしの夢

ひたちなか市立那珂湊第三小学校 四年 高石 空 奈

わたしのしょう来の夢は、ピアニストになることです。

今までに、何度かコンクールにも出場して失敗も経験して、ちよつとくじけてしまったこともあったけど、今でも毎日、ずつとピアノでいろいろな曲をひいています。

「ピアニスト」という夢をもったきっかけは、お母さんといっしょに、ピアノで遊んだことでした。はじめは、ただただけんばんをたたいっているだけでしたが、お母さんとピアノをひくのが大好きになりました。ある日、お母さんが、

「ピアノ習ってみようか。」

と、言いました。どれだけ苦ろうをして成長するかを知らずに、軽い気持ちで習うことにしてしまっただけです。練習時間も増えて、曲もどんどんむずかしくなり、気づけば、もうあのころのようにただ楽しいという気持ちではひけなくなっていました。でも、今までの六年間、どんなに苦しくても、辛くても、わたしはピアノをやめています。ピアノニストという夢をかなえるために、一生けん命がんばっています。最近になってようやく、むずかしい曲も少し楽しんでひけるようになりました。今、わたしは思います。

「ピアノを続けてきてよかった。これからもあきらめずにがんばろう。」

わたしは今、四年生。秋に合唱コンクールがあり、四年生の中からばんそう者を決めることになりました。課題曲は二曲あって、校内のオーディションで選ばれるために練習しました。ピアノ教室の先生と、指づかいやペダルをふむところを決めて、くり返し練習しました。ようち園や一年生の時にも、ばんそうをしたことがあります。そのころより指のとはくはなんでも広くなって、ふくざつな和音もこなせるようになっていたので、むずかしい曲でしたが楽しみながら練習できました。おかげで、自信をもってオーディションにのぞきました。どちらの曲も大好きなので、これからもっと練習しました。わたしのピアノとみんなの歌声が重なった時に、美しいハーモニーになるようにしあげたいです。

わたしの次の目標は、お母さんが好きなショパンの「ノク

ターン」と「子犬のワルツ」を上手にひけるようになって、発表会でひろうすることです。今のわたしにはむずかしい曲ですが、これまでと同じようにあきらめずに練習して、必ず実現させたいです。そして、集まってくれた人たちみんなの心をおてコンサートを開き、集まってくれた人たちみんなの心をおてだやかにできるような、やさしい音色をかなでるピアノニストになりたいです。これからは、ピアノを始めたころの気持ちをわすれずに、大好きなピアノと歩み続けていきたいです。

ふるさと自慢

取手市立戸頭小学校 四年 森^{もり} 谷^や 夏^{なつ} 羽^は

わたしのふるさと茨城県は、すてきな所です。茨城県のことを多くの人々に知ってもらいたくて、これから自慢話をします。

茨城県には、他の県にはないような良い所がたくさんあります。

まず、自然が豊かです。山があり、海もあり、川もあり、広い田や畑や山林もあって、すばらしい県です。

わたしは、茨城県のいろいろな所に行きましたが、楽しい思い出ばかりです。特に自慢したいと思ったことをしようかします。

大子町には、「袋田の滝」という美しい滝があります。観瀑台から見ると、すごい力でずつと見ていてもあきませませんでした。それに、大子町はいろいろなこんにやくが店で売

られていてびつくりしました。

大洗町には、「アクアワールド大洗水族館」があります。動物好きなたしにとって、そこはお気に入りの場所です。イルカやアシカたくさんのお魚たちがいるので、大洗水族館に行くとき天国にいるような気持ちになります。近くには海水浴場もあって海で遊んだこともあります。

校外学習で行った笠間市では、初めて笠間焼を体験しました。おじいちゃんのマグカップが上手に出来てうれしかったです。

つくば山にも登りました。ひたちなか海浜公園は、広くておもいつきり遊べます。

茨城県には、まだまだたくさん自慢できる場所があります。

そんな茨城県なのに、みりよくある県ランキングで最下位なのはなぜでしょうか。不思議に思っておばあちゃんに聞きました。

茨城県は関東平野の中心で、昔からとても農業がさかんで、くらしが豊かな所だったそうです。だから、他の県ときようそうしたりしなくても、豊かなくらしを農業で守り続けているのだと思います。調べてみると、れんこん、はくさい、レタス、メロンなど生産量が日本一の作物がたくさんあって、おどろきました。三年生の時、つくば山の頂上から見つけたきのほとんどがどこまでも続く田や畑だったことを思い出しました。

そんな豊かな茨城県だから人々ものんびりおだやかでやさしいのだと思います。

この夏休みにも、わたしはたくさん親切な人に会いました。初めて行った畑で、快く絵をかかせてくれたり、つかれていないかとイスをかしてくれたり、友だちが自転車のかぎをなくした時は周りの人々が十人くらいでいっしょにかぎをさがしてくれたりました。おつかいに行った時、おつりを落とさないように小さい袋に入れてくれた店員さんがいました。

わたしは、そんな茨城県に住むことが出来てほこりに思います。自然豊かで、見所がいっぱいあって、人々がやさしい茨城県は、わたしの自慢の「ふるさと」です。

われらの斗利出小学校

土浦市立斗利出小学校 四年 萩原那南

私の通っている斗利出小学校は、あと一年半ではい校になります。今、全校生とは五十二人。ひいひいおじいちゃん、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃん、おじいちゃん、お母さん、私、みんなここに通いました。斗利出小学校はそう立百四十二年。年れいは百四十二才というとてもれきしのある小学校です。

私は、三年生の時、そう合のじゅ業で斗利出地区や小学校のれきしについて調べました。おじいちゃんやお母さん、地いきのお年よりの方たちにインタビューをしてたくさんのが分かりました。小学校には、せん国時代に、土るいでかこまれたときから身を守るためにつくられた高岡丸の内館と

いう建物があつたこと、おじいちゃんのところには、校庭の真ん中に大きなさくらの木があつたこと、お母さんのところには、一階だての木ぞうの校しゃで、音楽室は建物がべつだつたこと、大イチョウは前もあつて、となりに井戸ときゅう食堂があつてきゅう食を作っていたことなど、変わっていたこともあるけれど、昔から変わらなず残っていることもたくさんあることが分かつてとても勉強になりました。

そして、斗利出地区の田宮には、江戸時代から伝えられてきた田宮ばやしというおはやしがあります。

毎年、運動会には、田宮の人たちのおはやしに合わせて、田宮以外の全校生とが田宮ばやしをおどります。お母さんも毎年おどっていたそうです。田宮ばやしは、県指定無形みんぞく文化財になっていて、全国的にも有名です。田宮ばやし保存会の人たちが、これまでずっと受けついで伝えてきてくれました。とても大変ですごくいいことだと思います。

斗利出小学校が、他の小学校と一緒にあった時、運動会で、田宮ばやしをおどれるのかなあと心配もありますが、今度はもっとたくさんの方々にぎやかにおどれるといいなという期待もあります。

新しい学校の名前は、新治ぎむ教育学校です。まだ、校歌も校しようも決まっています。今までは、歩いて通っていた学校も、バス通学になります。これから、どんないろいろなことが決まっていくのだろうなあ。お母さんは、自分の通っていた斗利出小という名前がなくなることも、校歌がきけなくなることも、とてもさみしいと言っています。

「山なみはるか つくばねに

理想の雲の わくところ
朝風分けて 日がのぼる
光のともよ いざつどえ

われらの斗利出小学校」

学校の名前はなくなっても、「われらの斗利出小学校」が、みんなの心の中にずっと残るように、地いきの人たちが受けついできてくれた伝とうを下級生たちに、伝えていけるように、あと一年半、せいっぱいすこしいきたいです。

水と大地とたくましい人々

阿見町立阿見小学校 五年 平野^{ひら}の ミチル

平成二十七年九月十日。テレビから流れるえい像に、私は思わず息をのんだ。そこには、防が決かいし、人々の住む町をのみこんでいく、あれくるう川の水がうつつていた。東日本ごう雨によるきぬ川のてい防決かいが起きた。いろんなところが水の災害にあい、常総市では六千五百とうの住宅が水につかった。

私が住む阿見町は、被害の大きかった常総市とははなれていけるけれど、同じ県内でこんなことが起こるなんて信じられなかった。

私は四年生の時、社会で茨城県のことを学習した。太平洋に面した地いきでは、たくさんの方々の海産物に恵まれ、漁業や水産加工業などがさかんにおこなわれている。日本で二番目に大きな湖、霞ヶ浦ではわかさぎ漁などがおこなわれたり、まわ

りのはす田でとれるレンコンの収かく量は日本一で、茨城県の名産品となっている。

また、笠間焼や結城つむぎといった芸術品や伝統工芸品も多く、その技が大切に受けつがれている。

私は茨城県のことを知るたびに、茨城県の人たちは昔から地いきの風土に合ったくらしを大切にして受けついできたんだと感じていた。水と大地に恵まれた自然の多い県ならではのくらし方だ。

でも、受けついできたのはくらし方だけではなく、地いきで助け合う心や家族を大事にする心もなんだと思う。

常総市の水害のニュースで目にしたのは、地いきの人たちがおたがいの家のかたづけを交ごに手伝ったり、川の近くに住む年をとった両親が無事かどうかかけつける人たちだった。あたりまえのように思えることも、あたりまえではなくなってきた今、人々の考え方はさまざまだ。家族が家族を思いやること、おたがいに声をかけ合う近所の人がいることを、子どもの私は安心に思う。ニュースで耳にするお年よりのこどく死やご近所トラブルなども、いろんな考え方がいるから起こることだ。でも、災害を前にしてそんな考えは二の次になる。生き残ること、生きていくことが必要だからだ。ひとりでいること、このこわさや、ご近所さんとのいがみ合いが無意味なことだということを感じさせられた。

この先、どんな災害が起こるか分からない。自然をいかして、風土に合ったくらしを守っていくこと、そして、助け合うことを大事にする心を受けついでいくことが、災害に強い国をつくることになると思う。

助け合って生きる、たくましい心を持った茨城の人たちを、私はみ力的に思う。
「茨城に生まれてよかった。」

私の大好きな家族

水戸市立常磐小学校 五年 舛井水姫

私は、お父さん、お母さん、弟、妹の五人家族です。

大黒柱のお父さんは、時にはきびしくおこることもありませんが、こまった時はいつでも助けてくれます。学童で私のせい服が見あたらなくなったりはだれよりも心配し、必死に原因をさがし見つけてくれました。ふだん、おだやかなお父さんが私のためにいっしょうけんめいになってくれていたのはとてもたのしかったです。そんなお父さんが大好きです。

次にお母さん。お母さんはかんどしさんをしていて、毎日、命と向き合っています。責任のあるお仕事の中、つかれを感じさせず私たちの学童の送りむかえに、夜はどんなにかかれていても料理をいっしょうけんめい作ってくれたり、夏休みは毎日学童へ持っていくお弁当をどのお母さんよりもきれいに作ってくれました。また、お母さんのお仕事場に一度見学に行ったことがあります。とてもたいへんそうなんですが、お母さんが印象的でした。そんなお母さんをそばにいます。私もお母さんのようなかんどしさんになりたいと思いました。

次に弟です。弟は今、二年生ですが小学校に上がったばかりのころは泣き虫でお友達の輪にも入れないような内気な性格でした。入学してから二年目ですが、友達もふえ自分の思い通りにならないとすぐ泣くということも少なくなってきたように思います。でもあまえんぼうなところはいつしよでもいつもお姉ちゃん、お姉ちゃんとかくつついて歩くすがたはともかわいく、またそう思う中、弟は長男なのでもっとしっかりしてもらいたいと思っています。

最後に妹です。妹は今、保育園の年長さんで来年小学校に入学します。小さいころから一番活発でわが家のしゅどうけんをにぎっていると言っても大げさではないくらいだと思います。でも物を覚えるのはとても早く集中力もありとてもがんばり屋さんなので見習わなくてはと思う場面もたくさんあります。そんな妹がたのもしく、また笑顔がかわいいので私は大好きです。

以上が私の家族ですが、こんなすてきな家族の一人として生まれてくることができるとも幸せを感じています。三人兄弟の一番上ということもあり、両親に注意を受けること、頼りにされることも多いのでいやになることもありましたが、今では両親が私達三人にたいして愛情を持って育ててくれていると分かったのでいやではなくなりました。家族は、私にとってかけがえのない宝です。

あこがれの保育士をめざして

筑西市立大田小学校 五年 佐久間 柚 風

私の将来の夢は、保育士になることです。私が保育園に通っていたときに、人見しりだった私をとでもやさしく見守ってくれたり、逆上がりの練習をずっと見ながら教えてくれた先生がいました。その先生は、いつも私たちと遊んでくれたり、相談にのってくれたり、いつしよに笑ってくれました。だから私も、保育園でけんかなし、いじめなしで友達と仲良く遊べました。

自信がなくて、一歩ふみ出せずにいた私に、「ここであきらめたら、何もできないよ。このまま大きくなったら、先生は悲しいなあ。」

と言いました。その言葉が私を救ってくれたまほうの言葉でした。その日から、自分に自信をもてるようになり、たくさんすることにチャレンジしたくなりました。先生も、「これなら安心だ。みんなをひっぱってあげてね。ぜったいにひっぱっていけるって、先生がやくそくするよ。」と。それから、先生にも、家族にも、安心してもらうことができました。

私が保育士になりたいという夢をもったのは、小学一年生の時でした。妹のおむかえで保育園に行くと、保育園でたくさん私をかわいがってくれた先生や、私を、活発に何でもチャレンジさせてくれた先生がとてもキラキラとかがやいているように思えたのです。その時に、今まで夢だったケーキ

屋さんから、保育士になってみたいと思うようになり、保育士の仕事に興味を持つようになりました。

私は今、五年生ですが、保育園であった出来事は、今でもわすれていません。このすてきな先生たちとの出会いをわすれずに、自分に生かしていき、保育士になって、

「すてきな保育士だなあ。」「この保育園は安心だ。」などと、言ってもらえるように、今から自分に出来ることを考えて、やれることはやりたいと思います。例えば、妹にやさしくしたり、ピアノで上手にえんそうできるように練習をするなど、今から自分の力にしていき、すてきな保育士になりたいです。

子どもも大人もみんなが安心して遊んだり、安心してあずけてもらうことができる保育士になれたなら、私はきつとたくさんの幸せと思い出で、心がいつも温かくなると思います。自分の心が温かくなれば、人にやさしくすることができると思います。

今は、やれることは少なく、できることは限られています。が、がんばって探せばきつとやれることがたくさんあると信じています。そして、いつでも人にやさしく、時にはきびしく接することのできる保育士になり、たくさんの人に愛され、たくさんの人を愛したいと思っています。

私に、自信と勇気をくれたあの先生のように……。

ばあちゃん家^ち 夏 つながる

桜川市立雨引小学校 五年 早瀬^{はやせ} 大悟^{だいご}

「ねえ、あとののくくらいで着くの。」

どこまでも続く、くねくねとした山道。ぼくの家も田舎にあるけれど、ばあちゃん家はもつと田舎だ。田舎から田舎への小旅行。何だかわくわくしてきたぞ。

お母さんの実家である「とくらのおばあちゃん家」は城里町（旧七会村って所さ）にある。

「さあ、仏様にお線香あげにいくよ。荷物積んで。わすれ物はない？」

お母さんは朝からはりきっている。何でお線香あげるのにはりきるのかなあ。

うす暗くちよつとこわいトンネルをぬけて、大きなカーブを七回曲って、牛のにおいがぷうんとしてきて、「モーツ」という鳴き声が聞こえてきたら、もうすぐそこだ。車のエンジン音が急にぐわあんときくくなる。最後のやたら急な坂道を登りきった。やつと着いたぞ。見上げると首がいたくなるくらい高い杉の山のふもとにあるのがばあちゃん家だ。

ばあちゃんの家に行くと、必ずたくさんのごちそうが出てくる。全部ばあちゃん家の畑でとれたものだ。ふかしたジャガイモ。キノコの天ぷら。あまいスイカやトウモロコシ。キュウリのつけ物にぴっかぴかのトマト。みんなおいしい。グルメリポーターのようにうまく説明はできないけれど、スーパーで買ってくるものとは全然ちがうのだ。

いろいろおいしいものがあるけれど、実は、ぼくが一番好きなのはタケノコ。でも、タケノコがとれるのは春なので、お盆の時期には食べられない。残念。ばあちゃんはタケノコとりの名人で、ぼくのためにおいしいタケノコをいっぱいほってくれる。どこが名人なのかというと、ばあちゃんは地面の下にかくれているような、小さいタケノコを見つけ出してしまふのだ。あまり大きくなってしまふと、タケノコはおいしくないのだそうで、

「大悟のために、見つけてやったよ。」

と、にこにこしながらとれたての小ぶりのタケノコを見せてくれる。そして、にものにしてくれて、先っぽの一番やわらかい所を、ぼくのお皿にこっそり入れてくれるのだ。

夕ご飯の前、盆棚にまつられた仏様の前でお母さんが手を合わせている。ずっと手を合わせているが、何をしているんだろう。

「みんなを見守っていてくださいって、ご先祖様をお願いしていたの。」

お盆だからだろうか。それとも、ばあちゃん家にいるからだろうか。お母さんの言葉を聞いて、ばあちゃんからお母さん、そしてぼくへと続く「つながり」が、さらにもっと過去へと広がるのを感じた。初めてだった。そうだ、ぼくはここでくらししていた、顔の知らないご先祖様たちとつながっていたのだ。

「大悟もお線香あげたら。」

「うん。」

お線香に火を付けながら、今日はご先祖様たちと少しお話し

してみたなと思った。

ひいおじいさんのこと

阿見町立阿見小学校 六年 住^{すみ}谷^や愛^ま菜^な

私には大子町に住む、九十四才になるひいおじいさんがいます。遠くに住んでいるのでなかなか会えませんが、お正月、お盆には会いに行きます。

九十才をすぎても、お風呂をわかすのは山の木を切りまきにして、毎日わかつて入っています。便利な時代なのに不便な生活をしているなあと思いました。ひいおじいちゃんに聞くと、若いころからの習慣で全く苦にならないそうです。健康の秘けつだと言っていました。春には山菜を取り、野菜、果物、米も作っています。大子町は山にかこまれて、山菜もたくさんあり緑の多い自然いっぱいのところですよ。

家の前には小川が流れていて、野菜のどろを落としたり、花だんの水やりに使うなど自然と共に生活をしています。蛇口をひねれば水が出てきますが、川の水も最大限に利用しエコな生活をしています。私の住む所では無理な事ですが、水を大切に作る気持ちを教えてもらいました。

そんな元気なひいおじいちゃんが、六月に倒れたと連絡があり、お母さんとお見舞に行きました。少し元気になっていて話をする事もできていましたが、ひいおじいちゃんにとっては孫であるお母さんの事を覚えていませんでした。お母さんが何度名前を言っても思い出してはくれませんでした。も

ちろん私と妹の事もだれなのか分っていません。お母さんはさびしそうでした。「仕方ないよ。歳だし病気なんだから、少し忘れるだけだよ」と言っただけで涙をふきました。親せきのおばさんが薬や点てきでほんやりしてしまっていると言っていました。私は病気や薬で大切な人の事も忘れてしまうなんてさびしいなあと思いました。

ひいおじいさんは戦争を体験しています。シベリアに抑留され、寒さきびしい冬でも道路整備・森林の伐採を命じられ疲れて帰ってから食事の用意とねるまで働らかされたそうです。ヘビやカエルも食べ粗末な食事しか与えられず、いつも死を覚悟していたと言っていました。だからこそ便利で物にあふれている今でも資源を大切にエコな生活を送っているのだと思いました。やっと日本へ帰って来た時の感情は言葉にならず今でも忘れる事ができないそうです。

私は戦争の事を全く知りません。ひいおじいちゃんがまだ元気な時に戦争の話が聞けて平和な今に感謝の気持ちがありました。

病室を出る時に握手をしました。しわしわでゴツゴツした手は、死を覚悟しながら生きようと強く思い戦争のおそろしさ、二度とおこしてはいけないうと持っているようでした。退院したらひいおじいちゃんに会えるのが楽しみです。

大好きいばらき

龍ヶ崎市立八原小学校 六年 田邊愛里

私は茨城が大好きだ。茨城は確かに田舎だし、田んぼばかりで何かぱつとしないイメージだが、そういうところも好きだ。茨城にはもつとたくさん良いところがあるのに、それを全然アピール出来ていないと思う。とてももつとたいないし残念だ。だから私が茨城の良いところ、好きなどころを伝えてこの作文を読んだあとに、みんながもつと茨城を知って好きになってほしいと思う。

私が茨城の一番好きなどころはお米だ。茨城には田んぼが多いのでお米がたくさんとれる。そのお米は日の光をたくさん浴びて育っているため、ツヤとコシがあつてとてもおいしい。白いお茶わんに盛られたきたての白いご飯は、とてもふつくらしていて香りも良く食欲をそそられる。そこに納豆を乗せて食べるのもつとおいしくなる。この組み合わせは最強だと思う。納豆の味にも負けないご飯のおいしさは、茨城で作られたお米だからだと思う。

どうして茨城のお米はとてもおいしいのか。それは空気のキレイさと水のキレイさがあるからだと思う。前にも書いたが茨城はとても田舎だ。でもだからこそ都会とはちがう空気がある。今まで人や車が少なくて嫌だなど思っていたけれど、だからこそ空気が汚れず、それがお米のおいしさにつながっているんだと思った。

水も、今でも井戸水で生活している家庭も多く、お米もそ

の水を使って育っているのでおいしくなるのだと思う。

もう一つお米のおいしさに関係している事があると思う。それは農家さんが大変な思いをして育ててくれているからだ。私は前に学校の学習で田植えと稲刈りをした。田植えは足にどろがからまってやりにくいし、こしがいたくなかった。稲刈りはうでの力が必要で大きく育った稲は、一度刃をあてただけでは切れないほど丈夫だった。自分で体験してみても米を作るのがどれほど大変なのかがよく分かった。農家の方が一つぶ一つぶに愛情をこめて作ってくれているんだと思いい、もっと大切にお米を食べようと思った。

茨城にはその他にもたくさん良いところがある。名産の栗やメロンは甘みがあつてとてもおいしいし、大子町にある袋田の滝は四季折々ちがう景色が楽しめる。偕楽園は日本三大名園の一つであり、梅だけでなく桜やツツジも見所だ。それに何といっても人の優しさ。知らない人でも道ですれちがうと笑顔であいさつをしてくれるし、登下校の時にはボランティアのおじいさんやおばあさんが私たちの安全を見守ってくれている。

このように茨城には、まだまだ知られていない良いところがたくさんある。もっともつとたくさんの人に知ってほしい。私が生れた茨城、大好きだ。

全国一の茨城の農産物

大洗町立大洗小学校 六年 岩城凌空

「あまくておいしい。」

ぼくが、銚田産のクインシーメロンを食べると必ず出てしまう言葉です。ぼくは学校で、茨城県は全国の中でも農業がとてもさかんなことを学びました。

そこで、ぼくは夏休みに、茨城県の全国一の農産物のメロンやレンコン、栗の産地に出かけて行き、作物が栽培されている様子について詳しく調べることができました。

まずはじめにメロンです。メロンの収穫量は、四万六千九百トン（平成二十年）で全国一です。ぼくは、大洗町のとなのメロンの産地で有名な銚田市に行きました。訪れておどろいたことは、ビニールハウスの多さです。

道の左右にずっと先までビニールハウスが並んでいるのです。メロン農家の人の話によると、銚田は台地で水はけがよく、鹿島などの海に近い暖かい気候のために、メロン栽培に向いている土地だということでした。メロン栽培の始まりは、昭和四十年代のころ、浅田さんという方がプリンスメロンを作ったことがきっかけだそうです。その後、おいしいメロンの栽培がさかんになりました。しかし、同じ土地に同じ作物を作ることがもつと起こる病気が発生したことで、農家の人々は、土作りや病気強いカボチャとのつぎ木などの工夫をすることで困なんを乗り越えました。

次に、レンコンです。茨城県のレンコン収穫量も二万七千

三百トンで全国一です。土浦市のレンコン畑に行きました。レンコンでおどろいたのは、葉の大きさです。大きい物で一メートル以上もあります。記録に残すために写真をとりました。レンコン農家の人の話によると、土浦は、国内で二番目に広い霞ヶ浦に面していて、その豊かな水と湿って深くやわらかい湿地は、おいしいレンコンを作るにはとても向いているので、かなり昔から栽培していたとのことです。レンコンは健康にいい食べ物として知られており、レンコンめんやレンコンサブレなどの食品にすることで多くの人たちに食べてもらえるように工夫していることが分かりました。

最後に栗です。茨城県の栗の収穫量も六千百十トンで全国一です。メロンやレンコンの時と同じようにおどろいたのは、道沿いには緑色のイガグリをつけた栗の木ばかりだったことです。鉾田や土浦と景色が大きく違うのは、周りに山が見えて、森や林が多いことです。旧岩間町では、栗農家が千三百六十八戸あり、全体の四割以上の農家が栗を出荷しているそうです。栗は縄文時代の遺跡から出土して、古くから食べていたことが分かります。

ぼくたちの茨城県には、このほかに、たくさんのおいしい農産物が栽培されています。ぼくは、これからも多くの県内の産地を訪れ、作物が栽培されている様子を見たり聞いたりして、人々の工夫を感じ取り、茨城の食べ物のおいしさにふれていきたいと思います。

バスケットと家族と茨城

常総市立石下中学校 一年 栗くり原はら麻ま央お

私の家族はバスケットボールが大好きです。今、ブラジルで行われているオリンピックも、バスケットの試合は録画して観ています。家族の共通の趣味でもあるので、家族で国内のプロチームの試合を見に行くこともあります。

私は小学校一年生の時、バスケットを始めました。五つ年上の姉の影響です。中学時代バスケット部だった父の友人が茨城初の男子プロバスケットチームのスタッフだったこともあり、そのチームの選手達とも交流ができて、それがきっかけとなりバスケットにも通い始めました。スクールには時々選手達も来てくれて、一緒に練習したり、アドバイスをくれたりしました。体が大きくて優しいその選手達も、今は他のチームに移籍し、なかなか会えなくなりました。そしてそのプロチームも名称が変わり、スクールもチームから独立しました。体制や名前が変わり、選手達は日本各地に離ればなれになったけれど、オフになるとその当時と変わらず、茨城に集合してみんなでごはんを食べたりしています。選手の中には、茨城出身の人も、そうでない人もいます。みんな茨城が大好きだと言ってくれます。茨城で産まれて育っている私はとてもうれしく自慢に思っています。

スクールのコーチや選手達と集まる時、私の家が集合場所になることがあります。私の家は父が社会人になった頃に建て替えた農家造りの家です。庭を舗装してバスケットのゴールを

置き、家でも練習ができるようにしてもらいました。そこでみんなでバスケットをしたり、バーベキューや水遊びをしたりします。コーチも選手達も、私達と一緒に遊んでくれるのですが、ごはんの量だけは私達と違い、とてもたくさん食べます。バーベキューの時のお肉の量も肉屋かと思うほど用意しても完食してしまいます。野菜もたくさん食べます。私の家ではお米も野菜も祖母が作っているのですが、おいしいと言ってくれます。みんなが集まれる家やバスケットができる庭、手作りのお米や野菜。都会ではできなかったかもしれないと思うと、茨城に住んで良かったと思います。

ここ数年、地震や水害などの災害が続き、私の家もダメージを受けました。地震ではかわらが落ち、壁にひびが入りました。水害の時は家の中に水が入ることはなかったけれど避難所のお世話になりました。どちらの災害の時も、がれきの山があちこちに見られ、被害の大きさを感じました。停電や断水も経験し、普通の生活がどれだけ幸せなことか、よくわかりました。家族もペット達も、みんな無事だったことにホッとしたのを覚えています。災害でたくさんの方の大切な人や大切な人を失くした方を思うと申し訳ない気持ちになります。でもこの気持ちを忘れずに、将来私が大人になった時に、茨城に住んでよかったと思えるように、できることを見つけて茨城を守りたいと思います。

私の大好きな家族やペット。そしてコーチや選手達が第二の故郷と言ってくれる茨城。どちらも大切にしていきたいと思えます。そして茨城がバスケットの盛んな土地になってくれたらいいなと思います。

五百年の伝統を受け継ぐお祭り

小美玉市立小川南中学校 一年 内山 楓

私の住んでいる町は、小川といえます。昔は、霞ヶ浦にそぐ園部川に大きな港があり、とても栄えていたそうです。そのため、古い建物や行事がたくさん残っています。特に、私が毎年楽しみにしている町のお祭りは、なんと五百年近くも前から続いています。

小川のお祭りは、小川の氏神様である素鷲神社のお祭りです。素鷲神社は、室町時代の終わり頃に、村の中心部を流れる園部川でご神体が見つかったため、翌年その神様をお祀りするために造られたそうです。そして、その年から、小川を守ってくださる神様への感謝や願いを込めて、夏にお祭りが行われるようになり、旧暦の六月に四度の祭礼が盛大に行われたと伝えられています。以来ずっと、その当初の形式を元に、受け継がれています。

お祭りでは毎年、町の中心地に「お仮殿」と呼ばれる神様の別荘を作り、普段は静かな町はずれの神社にいらつしやる神様を、そこへお連れします。

神様は、八百キロ以上もある立派なおみこしにお乗せし、町の男の人たちで担いで運びます。初日には、神様が最初に見つかったと伝わる園部川に立ち寄ってから、お仮殿にお連れします。最終日には、全地区を通るルートで地区ごとに担ぎ、リレーのようにバトンタッチして神社までお帰しします。

素鷲神社の神様は、勇ましい男の神様だそうです。おみこ

しを運んでいる途中、ときどき立ち止まって大きな掛け声と共に激しく揺らすのですが、これは「揉む」といって、神様の気持ちを盛り上げるために行うのだそうです。担ぎ手は、神様を汚さないよう、真っ白い浄衣を着ます。神様が心を乱さないよう、女の人はおみこしに触れてはいけなさとされています。また、おみこしのでっぺんにある鳳凰の飾りに、五穀豊穰を願って稲穂をくわえさせる習わしもあります。他にもいくつもの古い習わしが今でも大切に守られています。

神様がお仮殿で過ごされる三日間は、活気ある町の様子と幸せな住民の姿をお見せできるように、町中が協力して精一杯のおもてなしをします。お仮殿では巫女舞などが行われ、通りには地区ごとにおししの山車が出て、にぎやかに練り歩きます。また、毎年交代でその年の余興を担当する「年番」の地区では、全町で一つを大切に使っている豪華なおどり屋台も出します。年番の地区の人は、大人も子供も皆華やかな昔の旅人の衣装で、屋台と一緒に歩きます。昔は歩き疲れた時に飲むお茶をのせていた「茶台」というかごも屋台についていくのですが、その古い習わしが今でも残っているお祭りは、全国でも珍しいそうです。

お祭りには毎年、当たり前のこととして参加してきましたが、小学校低学年頃までは笛やたいこを奏でたり、掛け声を入れたり、お菓子やごちそうを食べたり、近所の人達と騒いだり、とても楽しい行事とばかり思っていて、長い歴史があり、伝統を受け継いできた貴重な行事だということなんて、考えたことがありませんでした。でも、お祭りの本当の意味を知って、もっと大切にもっと真剣に参加しよう、という気

持ちが生まれ、お祭りが以前にもまして大好きになりました。私は、小川が好きです。小川のお祭りも大好きです。だから、これからもずっと、良いところが残っていくといいなと思います。そのためには、小川の町やお祭りの良さをたくさんの人に知ってもらい、次の世代である私たちも、この町の伝統を大切に守ってゆきたいと思っています。

私の好きな茨城

笠間市立岩間中学校 一年 菊田侑奈

私は、茨城のイメージは、自然が豊かで、メロンやなしなど果物が作れ、野菜もなんでもとれる農業がさかんな県というイメージをもっていました。それは、私のおばあちゃんが、やさくに住んでいて、畑で作っている野菜や果物などを持ってきてくれるからです。その野菜や果物は、新鮮でとてもおいしいです。そんな茨城が私は、大好きです。

しかし、残念なことに行きたい県ランキングでは、いつも四十七位で最下位です。私は、それを聞いて、こんなにいい県なのにどうして最下位なんだろうと思いました。だから、茨城の自然や食べ物をもっとPRすることが必要だと思います。それは、私が家族旅行で太子町にキャンプをしに行ったことで、改めて感じました。

私は、今年初めて家族旅行で、太子町にキャンプをしました。行ってみてこんなにいい所とは、茨城に住む私でさえ知りませんでした。太子の、キャンプ場は、夜には、日ごろの

生活では気づかない星空が宝石のように散りばめられて、とても近く見れた気がしました。夜のさんぽでは、キャンプ場のとまっている人達のテントの明かりがもれてとてもきれいでした。自然とふれ合える環境が整っていて、私自身楽しく夏の思い出が作れました。このことから、県外の人に知ってもらう必要もあるけれど、まずは県内の人に知ってもらうことも大切だと感じました。

また、帰りに袋田の滝に行きましたが、お客さんが多くお店がにぎわっている所というイメージがありますが、なぜか観光客がほとんどいなくて、お店もほとんど開いていませんでした。夏のおわりごろで雨が降っていたからなのか、さみしいかぎりでした。

しかし、この日の袋田の滝は雨の影響で、いつもより水が増してすごい力で流れていて、私は感動しました。いつもの滝とは比べものにならないくらいで別の滝と見まちがえるほどでした。私は、雨が降りこんなにも水の量が変わることとで、ちがう見え方になることも知りました。紅葉や冬の氷った滝のPRだけでなく、水かさの増したはく力ある雨の袋田の滝をPRすることで雨の日の観光客が増え、お店のにぎわいが取り戻せることにつながると思いました。ただ、袋田の滝の入口下のおみやげ屋のおじいさんが、雨の量が増えると滝へ行くトンネルの中に水が流れ込み、一年に一度はお店の中に水が流れ込んで商品が水びたしにあわないようひなんさせることもあるそうです。こんな観光名所なのに、もったいないと思いました。安全で安心してお店が開けるように対策を立てることは、観光客が雨の日でも安心して訪れることに

つながると思います。

私は、これから茨城県を色々な方面からPRをするのとにも、観光地の安全で安心して見学できる対策を立て、行きたい県ランキングで上位になることで、茨城県のよさを多くの人に知ってもらいたいと思います。そして、私が大人になった時に、胸をはって、茨城県出身と言えるようにしたいです。

茨城の自然

つくばみらい市立伊奈中学校 一年 松本 彩

私の住む家の周りには自然がたくさんあります。

田んぼは季節ごとに色が変わり、新しくなえの植えられた田んぼは緑がきれいでまるでじゅうたんのようにです。田んぼの中の道を自転車をこぎながら通ると、風をさえぎる建物がないのでさわやかで心地いい風が吹いてきて気持ちがいいです。特に夏の夜は水が田んぼにはっているので暑いときも冷たい風が家に入ってくるのでとてもいいです。

野菜も果物もたくさん生産していて畑を自分で持っている人もいて野菜を交換している所もよく見ます。ですから買い物に行かなくてもいいので便利です。更に畑のことで人の輪も広がっていつて温かいです。農家の方達の野菜もとてもおいしくて地元だから安心して食べることもできます。全国生産量一位の野菜や果物があるので他の県の方達にも茨城の特産物を食べてもらいたいです。

茨城は空気もおいしいです。ぜんそくを持っていた人が茨

城に来たらぜんそくが治ったという話を聞いたことがあります。その位、茨城の空気はすごいものだと思います。緑があふれているから空気もおいしいのかなと私は思っています。

ですがこの自然も損壊されつつあるそうです。都市化が進み、豊かな緑がなくなっているのを想像すると私は悲しくなりました。魅力を増やすためとは言っても豊かな自然をとってしまうのはとても残酷なことだし、それで一つの茨城の魅力がなくなってしまうのは残念なことだと思います。その他にも農家をつぐ人がいないという問題もあり、農作物が減っていくのではないかと考えました。おいしい野菜を作り続けていくのはとても大変なことなのだと思います。私は田植えの体験をしたことがありますが一日やるだけでも大変だったのでそれを毎日続けていく農家の人達はすごいと思います。

その方達のおかげで茨城はおいしい物がたくさんあります。

メロンは生産量日本一で有名で、梨は全国トップクラス、いちごはとちおとめなどブランドが全国的に有名です。こんなに有名な物であふれている茨城はとてもすごい所で私は茨城県民として誇りを持っています。

スシローのお米も私の家の周りで作っていて茨城県は食の場面でもたくさん活躍しているのだなと思いました。

茨城県は緑の自然、おいしい空気、快い風が吹いていて人間の体に優しい、住みやすい所だと私は思っています。他の県にはないような自然の魅力があつて改めて茨城県がすごい

県であることを再発見しました。

緑の自然以外にもたくさん観光地があり、魅力にあふれています。

食の場面でも充実していて、地元のおいしい食材が食卓に並ぶのはとても安心で、とても嬉しいです。

この茨城県の魅力を受け継ぐにはたくさんさんの問題を解決していかなければならないと私は思っています。自然を守りつつ、観光地などの場所を発展させていくのはとても難しいことだと思ふし、今の私には何もできません。ですが、私が大人になったらこの魅力あふれる茨城を守るために、何か活動してみたいと思いました。簡単なことではないけれど、私は茨城を守るために頑張ろうと思いました。

あいさつでつながる

茨城県立並木中等教育学校

二年

笹尾優羽

「おはよう」これは私が朝起きて一番に発する言葉だ。

きつとたくさんさんの家庭でごく普通に交わされる、朝の挨拶だろう。しかし、私が住んでいる地域はそこからがちよつと違う。玄関を出て、家の前の通りに出ると、小さな子供からお年寄りまで、誰もが「おはよう」「行ってらっしゃい」「気を付けてね」と声をかけ合う。近所の人、小学生、中学生はもちろん、散歩で通る面識のない人も、ここでは、挨拶をするということが、自然なことだ。

以前、警察の方にこの地域は平和で、犯罪件数が少ないと

聞いたことがある。それは、この挨拶とも関係するのではないだろうか。例えば、もし家の近所で不審な人を見かけたら、必ず誰かが声をかけるだろう。「こんにちは」と。また、不審な車が止まっていたら、たちまち噂になるだろう。見晴らしもいいし、犯罪者が犯罪を犯しづらい地域であると思う。以前、こんな出来事があった。小学校の下校時、上級の女子二人が、男性に後をつけられた。明らかに不審な動きの男性に怖くなり、走って逃げようかと思ったが、意に反して「こんにちは」と挨拶をしてしまった。すると、その男性は焦った様子で走って逃げていったそうだ。私はそれを聞き、頭に浮かんだものがある。それは、相田みつをさんの「セトモノ」だ。セトモノとセトモノがぶつかる壊れてしまいが、どちらかが柔らかければ大丈夫。これは先程の挨拶にも通ずることだと感じた。少し大げさかもしれないが、挨拶は、たった今悪い事をしようとしていた相手の心さえも動かすことが出来るのかもしれない。挨拶には未知数のすごいパワーがあると思うのだ。

以前、都会に住む祖父が私の家に遊びに来た時に、通りかかった小学生に挨拶をされ、とても感動していた事があった。私はそんな当たり前のことに驚いている祖父に驚いた。しかし、確かに祖父母の家に行き、近くの通りを歩いても、挨拶をしている人は、みかけない。私も小さい頃は、返事が返ってこなくても、気にせず挨拶をしながら歩いていたが、今ではそれがおかしな事のように思えて、するのをやめてしまった。そして、これはもしかしたら、私が住む地域の自慢できるところなのではないかな、と思うようになった。その

時感銘を受けた祖父は、今では地元の子供達に、昔ながらの手作りのおもちゃを作ったり、挨拶運動を始めたりと大忙しだ。私の住む地域のように、自分の住む地域にも挨拶が根付いてくれることを願って活動をしている。だから私も、挨拶の素晴らしさをもっと多くの人に知ってもらいたいと思うようになった。

しかし正直なところ、私はもう少し都会に住んでみたいという思いもある。何か学びたいと思ったら、すぐにより良い環境で始められるという事がうらやましくて仕方がないからだ。自分のやりたい事、夢や目標を持ったときに、その思いはもっと強くなると思う。

それでも、私は今住んでいるこの地域が好きだ。夜空に浮かぶ満天の星空。澄んだ空気全てが気持ちホッとさせてくれる。そして、何よりの宝であると思う。私はこの場所がいままでこのままの空気感であって欲しいと願う。だから、私は今日もこれからもずっと笑顔で挨拶をしていこうと思う。そして、この地域の挨拶で繋がる輪を、もっともった大きなものにしていきたいと思う。

僕のふるさと

つくばみらい市立小絹小学校 二年

中^{なか}村^{むら}拓^{たく}真^ま

僕は、古い家に住んでいます。正確に言えば古い土地柄で暮らしています。木々に囲まれ友達遊びに来るとよく「トト口の森みたい。」とか「涼しい。」と言われます。敷地の中には、自分の家と祖父母の家があり、とても近い距離で暮らしています。このような環境で暮らしていると、楽しいこともたくさんあるけれど、逆に面倒くさいと思ってしまうこともたくさんあります。僕は何気なく毎日を暮らしてきたけれど、改めて、自分のふるさとになるこの土地や家族について振り返ってみたいと思います。

家系図を調べたり、祖父に話を聞いてみた所、祖父は七代目で、父は十八代目で、僕と兄は十九代目にあたるそうです。中村家の初代は、残っている記録を見ると、一六二〇年(元和六年)に居を構えたそうです。一六二〇年と言うと、江戸時代の初期にあたり、僕が今観ている「真田丸」の時代に近く驚きました。その頃から、僕のルーツがあると思うと親近感がわきました。家の裏には大きな木があり、大人二人が手を伸ばして両手をつなぐ位の太さです。この太い木も、中村家はずっと見守ってきたのかなと思いました。

また倉庫には、木製の大きな舟があり、祖父に聞くと昭和十三年、小貝川が氾濫した時に、高台にある中村家は、その舟を使って村の人々を助けに行ったそうです。今では考えられないけど、そのような話や道具が実際にまだ身近な所に

残っていて、改めて歴史のある家なんだと思いました。

敷地の中には、たくさん自然があり季節を感じる事ができます。春はたけのこ。ふきのとう、たらの芽がたくさん採れます。たけのこは、家族総出で掘りに行き、くわの使い方や皮むきを、祖父が教えてくれました。

夏には、スイカやかぼちゃ、ゴーヤなどが採れ、またカブト虫やクワガタが、すももの木に、朝と夕方に集まります。旅行に行った時、お店で売られているのを見て、他の人はカブト虫やクワガタを、買うものだと知り驚きました。セミやフクロウやキツツキの鳴き声も聞こえ、セミの羽化を見たことも夏のいい思い出です。

秋には、栗や柿、いちじくが採れ、ススキやコスモスが咲き乱れます。栗拾いも家族総出です。栗の木は約六十本あり、蚊に刺されながら、足とトンガを上手く使い採ります。栗の渋皮煮は、祖母が母に教え、中村家の秋の一品になりました。冬には、ゆずや大根や白菜が取れ、ゆずの木に、とげがあることを初めて知りました。そして、また春が訪れます。

このように、花や食べ物、動物によって季節を感じることができ、すばらしい環境にめぐまれ、幸せな所で生活できているんだと改めて実感しました。

ただ良い事だけではありません。敷地が広い分、維持していくのも大変です。台風の後には、あちこちに枝や葉が落ち、掃除するのが大変です。のんびりしている時でも人手が足りず呼ばれます。夏は、ほうっておくと、草が三メートル位に伸びるので、度々草を刈らないといけません。僕も、この夏祖父に教わり、トラクターに乗りました。また、盆や正月に

は、来客があり、テレビを観ていたくても、顔を出さなければなりません。お年寄りとお話をするのは、何を話していいのかわかりませんが、最近はいろいろな人の昔話を聞くのも楽しく感じられるようになりました。

僕はここでの暮らしが気に入っています。都会に出るとワクワクしますが、気疲れし、家に帰って緑を見るとほっとします。祖父母も年をとってきたので、もっといろんな事を教わり、僕ができることは積極的にやり、これから何代も何代も続いていくように、このふるさとを守っていきたいです。

本当の友達

水戸市立国田義務教育学校 八年 田尻夢麗

本当の友達とは何だろう。学校生活の中で楽しく話したり、笑ったりしていればいいのだろうか。でも、それは本当の友達ではないのではないかと私は思います。

私が住む国田は、地域とのつながりが濃い所です。米づくりや収穫祭などの学校行事は多くの地域の方々が協力をして下さり、また登下校の際には声をかけてくれたり、あいさつをしたり、地域全体がとてもいい雰囲気です。子ども達の数も多くないので幼稚園からずっと同じクラスで、長い友達は十一年間一緒に大きくなっていくといった感じでした。

友達はもちろん、友達のお父さんやお母さん、またおじいちゃんやおばあちゃんとも密に関わることができ、クラス全体が家族のような感じでした。そんな国田の地で育った私は本

当に幸せだなと思いました。

幼い頃から一緒に育った友達とは共有できる思い出も多々ありません。みんなお互いの性格も分かり合っていて気心が知れているので楽しさも倍増だし、つながりや絆も深いように感じます。

ある日、学級の係を決めている時のことでした。一人二つ、係を受け持つことになり、ジャンケンや拳手などの方法で決めていましたが、私が希望する係はすでに決まってしまうていました。そのため、まだ誰も決まっていない残りの係に名前を入れました。二つ目の係決めも続けてやったのですが、人気の係はどうせすぐに決まってしまうと思いい、なかなか決まらなそうな係のところの名前を書こうとチョークを持って黒板の方に進んだ時でした。ある友達が私のとなりでスツと寄り、耳元で、「さっきの係決めるときもがまんしたんだから今度は自分がやりたい係をやりなよ。」と言ってくれたのです。わたしはとても嬉しい気持ちになりました。そして何より、私に知らないところで一度目の係決めの様子を見て気にかけてくれていた友達がいたことに驚きと嬉しさが入り交じった気持ちでした。その声をかけてくれたのは私の親友だったので。小さい頃からずっと一緒に育ち、色々なことを共に経験してきました。ただ、楽しく話したり、笑い合ったりするだけでなく、悩みがあれば相談し、相手のことを第一に思い接することが出来る大切な親友。自分のことよりも相手のことを最優先に考えてくれるかけがえのない存在です。そんな親友がいてくれることに感謝したいと私は思

ます。

私は今までの学校生活の中でうそをつかれた経験がありません。その時の気持ちはどのように言い表わしたらいいかわからないほどの怒りや悲しみ、悔しさなど色んな感情がこみあげてきました。私は小さい頃から父や母に「うそは絶対いけない。」と言われて来ましたが、なぜいけないのかが、複雑な気持ちを味わった経験から分かりました。

相手を大事に思うことが出来るから、相手も自分を大事に思ってくれるし、いい時も悪い時も、楽しさも悲しさも、嬉しさも悔しさも一緒に経験出来る友達がいてくれることは、当たり前ではなく、とてもありがたいことだと思います。そんな親友に出会えたことに感謝をし、残りの学校生活を送りたいと思います。

僕が英語を学ぶ理由

笠間市立笠間中学校

三年

高^{たか}野^の 淑^{よし}之^{ゆき}

今年、僕は「インタラクティブフォーラム」という英語で会話をする大会に参加した。もともと英語に興味があり、どんなことを話すのか練習を始める前はわくわくしていた。

一つの大会で、一人三つのことについて話すのだが、誰もが話す内容に、「茨城の中での、私のお気に入りの場所」というものがあつた。それを聞いたとき僕は仰天した。僕は、英語を使う、外国のことばかり頭の中にあつて、日本の中の「茨城」のことが頭の中になかつたからだ。もちろん、僕は

茨城県民だから、茨城は好きなのだが、「お気に入りの場所」について、あまり考えたことがなかつた。果たして、そのような場所などあつたのだろうか。

今までに行つたことのある場所を模索した結果、「袋田の滝」「千波湖、偕楽園」について、僕は思い出があることに気づいた。袋田の滝では、四季で異なる滝の表情に感銘を受けた。こんな美しいものが茨城にあつたのかと、茨城の素晴らしさを感じた一時があつた。千波湖での思い出は、祖父と湖の周りを走つたこと、花火大会に行つて、その迫力に胸を打つたこと、日本三名園の一つ、偕楽園での思い出は、梅の美しさに感動したことだ。これらの感動を英語で伝えようと思つた。

ふと、僕は気づいた。つい先まで、茨城を飛び出し、外国のことを考えていたのに、今自分の住んでいる茨城について考え、感動を思い起こしていたことを。他の人と英語で話していくことで、他にももつとたくさんの茨城のよい場所があつたことを思い出せた。この感動、すばらしさを、外国の人に伝え、外国の人に、「茨城」という日本の県を知ってもらいたい、と考えるようになった。

僕の住んでいる、笠間中での予選大会のとき、笠間市の教育長さんはこう言つた。

『『グローバル』な人になって下さい。』『グローバル』とは何だろう、と思つた。「グローバルとは、『グローバル』と『ローカル』の造語で、和製英語です。みなさんには、英語で、自分の地域の良さを伝えられるようになってほしいと思います。』

もう少しで、インタラクティブフォーラムの本番、というところだったそのとき、僕ははっとした。「なぜ、英語を学ぶのか。」ということに気付いたからだ。

「英語を学んで、外国の人に、茨城のよさを伝えるためだ。」そう気付いて、ますますやる気が出てきて、本番に臨むことができた。

笠間市の大会が終わった後、僕はこのような夢を持った。

「英語を勉強し、外国に行つて、外国人の友達をつくり、そこで自分の出身地である茨城のよさについて話し、茨城に来てもらい、茨城のいたるところを案内すること。」

このような夢が叶った時を想像した瞬間、僕は茨城のことも、英語のことも、前よりずっと大好きになった。

外国人の観光客が来ると、茨城県の観光業もさかんにになり、よりよい茨城の未来につながると思う。

僕の夢は、「茨城」のおかげで見つけることができた。これから、茨城のことを考えながら、英語を興味深く学んで行こうと思う。

豊かな自然の茨城を未来へ

茨城町立明光中学校 三年 加藤雄大

車の中から見た空に、いつもは見なかったことのない大きな鳥が飛ぶのを見つけた。一緒に乗っていた祖母と興奮して、

「二メートルぐらいありそう!」

「貫禄あるねー。何だろうね。」

と、口々に言い合った。すると母が

「オオワシじゃない? 涸沼に飛来した姿が確認されたって新聞に載っていたよ。」

と珍しくなさそうに教えてくれた。

「オオワシ? えーっ! こんなところにワシなんて飛んでくるの? すごいじゃん!」

はるか高くを飛んでいるのはつきりと姿が見えて、悠々と空を舞う姿にほくは少し感動した。動物園やテレビでなら見たことはあったけれど、本物は迫力が違っている。茨城町に住むようになって初めて見たオオワシ。ほくは少し気になって、オオワシが生息する場所について調べてみた。ふだんはロシアで繁殖するが、越冬のために韓国や日本の北部にやってくるという。涸沼では、一九八八年に初めて飛来が確認され、それがラムサール条約に登録になる条件の一つでもあったようだ。最近ではわざわざオオワシの飛来を見るために近県からも人が訪れるようになってきているのである。そこまで調べて、偶然見たオオワシが自然の象徴のような気がして、自分の住む地域のすばらしさに少し誇りを持てるように

なった。

昨年ラムサール条約に登録された涸沼は、多くの住む茨城町、そして鉾田市と大洗町にまたがっている。最近では活性化の活動の一つとしてボランティアガイド「おもてなし隊」が発足したことが新聞に載っていた。たくさんの水鳥が生息し豊かな自然が美しい涸沼を多くの人に紹介できるようになることは、地域の活性化として喜ばしいことである。しかし、近年涸沼の特産と言われるヤマトシジミの漁獲量の減少について知っている人はどれくらいいるだろうか。干拓や護岸工事によって水の循環がうまくいなくなっていることや、生活排水の流入による汚染で、かつての涸沼を知っている人たちからはその汚染を嘆く声が出ているそうである。ぼくは母からその話を聞いて、以前新聞で読んだ水質改善の取り組みを組みを思い出していた。滋賀や千葉などで地域の住民が協力し合って合成洗剤を排除しせっけんを作って使うことによって水質改善に取り組んでいるという内容のものである。水質の汚染は生態系を破壊する原因にもなる。住民達が汚染状況に危機を感じ、環境への負荷が少ないリサイクルせっけんの利用を始めているのだ。リサイクルせっけんは家庭から回収された食用油にカセイソーダを混ぜて作られるという。ぼくらが日常で使う界面活性剤の入った洗剤と違い自然に近い廃水になるメリットがある。これらの活動はすぐにはないけれど、水質環境の悪化をくい止め徐々に改善へと導いているらしい。ラムサール条約にも登録されるような厳しい条件を満たす美しい涸沼も、そのままの姿を未来につなぐ為に水質改善への取り組みを始めるいい時期なのではない

だろうか。千葉のせっけん工場は一万人以上の地域住民の出資によって建てられ活動をスタートさせることができた。行政にまかせつきりではない、住民一人一人の意識と行動から水質が守られたのである。風光明媚な涸沼の自然もぼくたち地元住民の意識改善により守っていかなくてはならない。大きな翼を広げ悠々と空を飛ぶオオワシの姿を、ぼくは来年も見ることが出来るだろうか。随分前から飛来していたはずなのに初めて見たオオワシ。オオワシは緑が多くエサの豊富な場所へ来るそうだ。日本にいる鳥の中でも最大級と呼ばれるその姿を、多くの人が目近で見ることが出来るように、ぼくたちには今ある自然を守るべき義務がある。豊かな自然こそが茨城の財産なのだから。

自分の地元は。

守谷市立守谷中学校

三年

浅川 未奈実

「カレー食べたい！」

「よし、今夜は夏野菜カレーだ。」

母はすぐに作り始めた。私の家は野菜を買うことがあまりない。祖母が畑で作っているからだ。じゃがいも、人参、玉ねぎ、トマト、きゅうり、ナス。特に夏は家で作った野菜のパレードだ。祖母がゆでるとうもろこしの甘さ。バターとマヨネーズで食べるほくほくのじゃがいも、幼い頃から私はよく食べさせてもらっている。

私の住んでいる守谷市は、水と緑に囲まれた自然豊かな町

である。私が保育所に通っている時のお散歩コースは、私の家の前を歩いて、田畑が広がっているとこまで行き、草むらで追いかけてこをする。帰りは、牛を飼っているお家に行って牛を見学。とてもよくおぼえている思い出。とても好きだった。

自然ばかりが残る町かというと、そうでもない。ここ三十年で守谷はだいぶ変わってきている。住宅が増え、人口が増え、町から市になった。新しい鉄道「つくばエクスプレス」も開通し、東京へのアクセスが大変便利になった。大型商業施設ができ、市内で生活に必要なものはほとんどそろろう。駅前も整備され大きなマンションがたくさんできた。母に言わせると町の風景が変わりすぎて、昔の道が分からなくて困るそう。私は母と違って、便利で暮らしやすいと思っている。では、母の言うように自然豊かな守谷市は無くなってしまうのだろうか。いや、そうではない。私の家のまわりは田畑が残っており、農業もすっかり行われている。また、歴史も古い。守谷の八坂神社は、祭りになるとたくさんの人にぎわう。昔は城下町として栄えたそう。平将門がここに城を築いたのも、豊かな自然と敵から守りやすい地形から選んだそう。 「守りやすい谷」から守谷になったと言われている。

私は「温故知新」という言葉が好きだ。古いものを学び直し、そこから新しい知識を見出し自分のものにするという意味だ。私も自分の住んでいる町守谷、この茨城について学び、歴史や史跡、文化を大切に後世に伝えていかなければならないと思う。茨城は海も山も湖もあり、水も食べ物も美味

しくて、住んでいて不自由しない環境だと思う。そして、近年は近代化が進み、大変便利な町になった。こんなすてきな町をもっといろいろな人に知ってもらえるよう努力しなければならぬと思う。

今年の六月に開かれた商工会青年部主催の絆フェスティバルに、「わが町の紹介ビデオ」コンクールがあった。私の所属する守谷中吹奏楽部が協力することになった。守谷のよいところを私たちが紹介する構成であった。神社や、学校、祭りの取材。駅や工場の紹介もした。そこで改めて古いよいものと新しいよいものが合体した素晴らしい町だということに気付いた。自分の住んでいる町の良さを発見すると、守谷への愛着が増し、そんな守谷を作ってくれている周囲の大人の方々への感謝の気持ち湧いてくる。本当に素晴らしい自慢の町である。守谷に住んでいてよかった。心からそう思った。私が見落としている茨城の魅力は、まだまだあると思う。私は地元である守谷のよさについてたくさん知ることができたので、今度は地元である茨城県について興味深くよさを発見しようと思う。そして、そのよさを全国に発信していきたい。

茨城の食べ物

茨城県立結城特別支援学校高等部

一年

池田奈々

茨城県には、いろいろな特産物があります。梨やメロンなどの果物、レタスやレンコンなどの野菜、お米や納豆などもあります。茨城は海や山などの自然も豊かでおいしい食べ物も他にもたくさんあるのでとても暮らしやすい県です。私も食べていない食べ物がたくさんあるので食べてみたいと思います。

私は、毎日茨城県産のお米を食べています。祖父の実家でお米を作っているからです。お米を炊くと良い香りとふっくらつややかでおいしいです。そのお米でカレーライスやチャーハンなどを作ります。また静岡の親せきに定期的にお米を送っています。スーパーなどで売られているお米と比べてしまうと茨城のお米の方がおいしいと言って喜んで食べてくれています。自分が作っているお米ではないけれど、とてもうれしく、誇らしく思います。

他県の人に「茨城と言えば？」とたずねると「納豆」と答えるように有名で主にごはんのおかずとして食べる人が多いと思います。他にもお好み焼きに入れたり、お味噌汁に入れたりしてもおいしく食べられます。中にはおいが嫌だという人、ネバネバするのが嫌だという人もいますが、体にはとても良い食べ物なのでぜひ、食べもらいたいと思います。朝、食べるよりも夜、食べる方がより、体に良いそうです。

茨城県の県西地区では、梨作りもとても盛んです。豊水や

幸水など、何種類もあり、とてもみずみずしくて甘くておいしいです。他にもぶどうやメロンなどの果物も作られています。結城市の上山川地区では、巨峰という種類のぶどうが盛んに作られています。一つ一つの実が大きくて、とても甘くておいしいぶどうです。七月から十一月位が巨峰の旬で他方面からも買いに来られる人が多くいるそうです。

茨城県では、レタスの生産も盛んで全国でも二位の生産量をほこるレタス大国です。春の三月から五月、秋の九月から十一月に茨城を中心とした平野部で栽培されています。主にサラダとして食べる人が多いですが、炒め物にしたり、スープやお味噌汁に入れてもおいしく食べられます。他にもレタスをおいしく食べられるレシピがたくさんあると思うので、いろいろ調べてみたいと思います。

茨城県のレンコンは、日本一の生産量で全国の半分近くのレンコンは茨城産です。県内で生産されるレンコンのほとんどは霞ヶ浦周辺で作られていて土壌が肥え、水温が高いという自然条件が、おいしいレンコンを育てるといわれています。レンコンはとても栄養価の高い野菜です。ビタミンCやビタミンB6、食物繊維やレクチンなどの栄養素が含まれています。貧血の予防や便通を良くしたり、大腸ガンの予防などに効果があるそうです。

レンコンの調理方法は、煮物、炒め物、揚げ物といろいろありますが、とくにきんぴらがおいしいです。栄養価の高い野菜なので、たくさん食べてもらいたいです。

茨城県の水産物を代表するものの一つがしらすです。しらすはおもにカタクチイワシやマイワシなどイワシ類の稚魚で

す。カルシウムが豊富でそれ以外にもDHAやEPAが多く含まれています。高血圧や動脈硬化の原因となる血中のコレステロールを減らすなどいろいろな効果が期待されます。またしらすは離乳食を始めた赤ちゃん、歯の丈夫でなくなったお年寄りの方にも食べやすく安心して食べてもらえます。骨や内情も気にすることなく一匹そのまますべてを食べられる食材なのでカルシウムを摂取することができます。

このように、茨城の食べ物はおいしくて、栄養が豊富で体に良い物がたくさんあります。ぜひ、たくさんの人たちに茨城でとれた食べ物食べて、健康でいて欲しいと思います。

守りたい、石岡のお祭り

茨城県立中央高等学校 一年 谷や口ぐち結ゆい香か

私は、茨城県に生まれ、石岡市で育った。私が住んでいる石岡市では、毎年九月に、常陸国総社宮大祭が行われる。石岡市民が一致団結して行う祭りであることから、通称「石岡のお祭り」とも呼ばれ、人々に親しまれている。

この祭りは、八世紀頃に、武家階級の武運長久、五穀豊穡を祈願する祭りとして始まった。それが庶民に広まり、現在では山車十四台、獅子三十二台が町中を練り歩き、無病息災、交通安全等を願う祭りとなっている。

長年続く、伝統ある石岡のお祭り。私は幼い頃からお祭りに参加しているので、お祭りの準備から、後片付けまでの様々な場面を見ている。そんな中、私が特に気になっているのは、

お祭りの後のゴミの問題だ。

毎年、約四十万人の観光客が訪れ、町中が賑わう。大勢の人が帰ったあと、町中はとても汚れている。屋台で食べ物を買って、食べたあとのゴミがそのまま道端に放り投げてある。飲みかけのお酒やジュースがこぼれ、空き缶があちらこちらに散らばっている。タバコの吸殻が、大量に落ちている。そんな光景を見て、私はとても虚しい気持ちになりながら、ひとつひとつゴミを拾う。伝統ある祭りを、皆で楽しみ、盛り上げていくことは、石岡市の発展につながるし、多くの人とつながりを深めることができるので、とても良いことだと思う。しかし、ゴミを自分で持ち帰ったり、散らかさないように気をつけたりすることの意識が足りていないように感じる。祭りのあとに、嫌な思いをする人がいるかもしれない。自分が出したゴミを、誰かが拾うのかもしれない、ひとりひとりが少しでも意識することで、ゴミは格段に減るであろう。伝統ある祭りだからこそ、節度ある行動を心がけるべきだと考える。そして、私が大好きな石岡市の町中や、石岡のお祭りを、もっと良くしていきたいと考える。

茨城県を代表するお祭りとして、それにふさわしい印象を保ち続けていく必要があると思う。そのためには、歴史ある店が連なる、美しい街並を大切にしたり、石岡市の環境を守るといったことが求められる。今年も、総社宮へ行く途中の交差点の一角に、かつての石岡小学校の校門だった「陣屋門」が完成した。この門ができたことにより石岡市にまたひとつ、歴史的雰囲気加わったと感じ、とても嬉しくなった。しかし、最近では、石岡のお祭りが更に発展することが望ましい

が、少子高齢化により、祭りに参加する子どもたちの人数が減ってきていると聞いた。人不足によって、祭りに参加できない地区も出てきているという。もしも、昔から続く石岡のお祭りが、さまざまな問題によってなくなってしまうたら、とてもさびしく、もったいないなど感じる。そうならないためにも、石岡市に今住んでいる人たちが、これから生まれてくる子どもたちに、石岡のお祭りについて伝え、お祭りを大切にして、これから先もずっと受けついでいければいいなと思う。

私は、石岡市の魅力、石岡のお祭りの魅力を、これからもっと発信していきたいと考えている。石岡は、田園地帯が広がり、有名な日本酒造があり、歴史ある古墳や遺跡が残されている、風情ある場所だ。そんな石岡市で毎年行われる、石岡のお祭り。さまざまな問題点や、改善すべき点は、たくさんあるだろう。しかし、それらの問題と向き合っていくことで、ひとつひとつ解決していき、石岡のお祭りを、よりよいお祭りにしていきたい。そして、この伝統ある石岡のお祭りを、もっとたくさんの人に知ってもらいたいと思う。一步一步ではあるが、石岡市民である、私たちが、誇りに思えるお祭りに育てていくことが大切だと考える。そうすることで、石岡市の存在価値を高めていくことができるし、この石岡市は、今よりもさらにより町になるだろう。

茨城の防災を考える

茨城県立友部高等学校 二年 小林大起

私は今年の夏、地元の笠間市、そして茨城県について考える機会に恵まれました。昨年度から続けて参加してきた「かさサミット」「かさまハイスクール会議所」の経験を生かし、七月二十八日、八月二日と十七日の三日間、「いばらきハイスクール議会二〇一六」に参加しました。高校生六十三名が県会議事堂に集まり、六つの委員会に分かれて意見をまとめ、実際に知事や教育委員長等に質問や提言をしました。

私の住む笠間市は、市街地と田園地区とにかなりの差があります。私は福原に住んでいて、スーパーマーケットもコンビニエンスストアもありません。一番近いコンビニエンスストアまで、自転車でも四十分もかかります。

しかし、私はそんな福原が好きです。都会や市街地にはない豊かな自然があります。私の家は山裾にあり、幼い頃は裏山で遊んでいました。木に登り、虫を採り、木の実を見つけて。裏山にはたくさん遊び道具がありました。それが当たり前だと思っていた私は、高校入学後、友だちが誰もそんな経験をしていないと聞き、驚きました。幼い頃当たり前だった「山で遊ぶ」ということが、貴重な体験だったことに改めて気づきました。

そして、五年前。福原も東日本大震災に襲われました。海に面していないので津波の被害は受けず、液状化もありませんでしたが、やはり断水や停電に見舞われ、屋根のぐし

や塀が壊れた家もありました。そんな中、私たち家族は「自然」に救われました。水は裏山の小川でくみ、ランタン一つで生活することができました。しかし、同じ茨城県内でも津波や液状化で大きな被害が出ました。テレビが見られるようになったとき、東北の甚大な被害や福島第一原子力発電所の事故の様子とともに、茨城県が受けた被害の報道が、小学生だった私の心に重い衝撃を残しました。

だから私は、この夏のハイスクール議会で「防災」の委員会に所属し、委員長を務めました。そして、橋本県知事に提言をさせていただきました。私たち防災委員会は、「今私たちにできること」「県知事に質問したいこと」「提案したいこと」の三点に整理して議論し、質問と提言をまとめました。

私は防災委員長として、橋本県知事に三つの提言をしました。一つ目は、携帯電話やインターネットに頼らずに情報伝達が行えるようにすること。災害時の情報伝達方法としては、防災行政無線が多く使用されています。無線はインフラとして強い面はありますが、専用の機器があることが前提となり、被災で電力の供給が止まる可能性を考えると、通信手段として適しているとは限りません。そこで私たちは、自治体ごと、施設ごとに衛星電話を設置することを提言しました。衛星電話が普及すれば、被災者だけでなくボランティアにも情報が速く、正確に伝わります。

二つ目は、継続的なボランティア参加者を確保することです。今年になってからも各地で震災や水害が起こりました。被災直後はボランティア参加者が多いのですが、次第に減ってしまいう現状があります。そこで私たちは、地域や家族で参

加できる災害ボランティア体験イベントの開催を提案しました。また、企業にボランティア活動を義務づけることも考えました。もちろんボランティアはあくまでもボランティアで、強制されるものではありません。むしろ、ボランティアが私たちの生活の一部として定着するような啓発活動をすべきだと訴えました。

三つ目は、ボランティア保険の周知です。防災委員会でも、以前からボランティア保険を知っていた高校生議員は一人もいませんでした。特に、若い世代はボランティア保険の認知度が低いということも知りました。だから、SNSやテレビCM等でボランティア保険を知ってもらうことを提案しました。また、高校や大学等入学時に、ボランティア活動の意志があるかどうか確認し、ボランティア保険に加入してもらうことで、災害時に速やかにボランティア活動が可能になります。これらの三つを提言し、橋本知事は一つ一つ丁寧にお答えくださいました。

かさまサミットやかさまハイスクール会議所で、地元笠間について、他校生や青年会議所の方々などと話し合いを待たたこと。さらにハイスクール議会で委員長として高校生議員をまとめたことで、地元茨城県がより安全で住みやすい場所であってほしいと考えるようになりました。いや、「ほしい」ではなく「しなければならぬ」と考えます。私は将来公務員として地元で働きたいと思っています。海があり、川があり、豊かな自然と産業、しかしだからこそ、災害の危険と隣り合わせでもあります。愛する茨城が、豊かで元気で災害に強い茨城であるよう、今できること、将来することによって貢献し

ていきたいと考えます。

茨城の爪

水戸啓明高等学校

二年

駒木根こまぎね

帆ほ

純すみ

「いただきます。」

この言葉は、私が人生で一番多く口にして言っている言葉だと思
う。今までも、これからもきつと。一日三回、毎日欠かさない。

私は、小さい頃からずつと食えることが大好きだった。起き
ている時の中で、一番の幸せは食べている時。だって美味し
いものを食べると笑顔になれるでしょう？どんなに悲しい時
でも、何かに失敗して落ち込んだ時でも、美味しい物を食べ
たら、自然と心が癒される。だから食える事が大好きだ。

私が考える料理は、お腹を満たす為だけのものではない。
一口で感じることが出来るもの。言葉が通じなくてもお互
いに楽しめるもの。いわば、一種のコミュニケーションツ
ールのようなものだと思う。私は、もっとたくさんの人に気づ
いてもらいたい。「料理」にはすごい力があるんだ」という
事を。

今まで描いてきた将来の夢は、パティシエールから始まり、
シェフやパン屋さん、喫茶店やカフェの店員など、全て「食」
に関わるものばかりだった。今でも食に関する仕事につきた
いと思う気持ちは変わらない。大学も食品関係の学部に進学
するつもりだ。

私がこんなに料理に興味を持ったのは、家のご飯が美味し

かったからだ。お母さんの料理はとても美味しい。私の中で
は世界一。やっぱりどんな料理も「おふくろの味」というも
のには勝てないのかもしれない。(いつかは私もお母さんの
味がつくれるようになりたいものだ。)

そして、お母さんの料理をより美味しくしてくれたのは、
その食材だと思う。私の住む茨城県には、たくさんの美味し
いものがある。しかし、変わった食材というよりは、どこの
県でも作っているようなものが多い。そのせいかな、茨城県の
食材の美味しさはあまり知られていないようだ。魅力度最下
位と言われる茨城県。魅力が無いのではない。魅力を伝えき
れていないのだ。確かに、東京などから比べたら田舎で何も
ない所だと思う。どこを見ても田んぼばかりだ。表面だけ
見たら、ぱつとしないどこにでもある風景かもしれない。
しかし、ちゃんと中身を見てほしい。茨城県のを食べて
ほしい。お肉、野菜、果物、魚と様々な食材が美味しいはず
だ。この新鮮な空気の中で、広く雄大な土地の中で、山や海
といった自然の恩恵の中で育ったものが、美味しくない事
があるだろうか。いや、そんな事はあるはずがない。私は自信
を持って言える。茨城県の食材は美味しい。もっとたくさん
の人にこの味を知ってもらいたい。たくさんの人と美味しさ
を分け合いたい。私はそう思う。

「能ある鷹は……爪を隠す。」

これは、自虐が面白いと話題になった茨城県のピーアール
動画で、お笑いタレントの渡辺直美が四十七位の言い訳とし
て口にしたことわざだ。けれど私は、爪を隠してばかりでは
いけないと思う。最下位と言われ続けている今こそ、真価を

示すべきだ。

私にはやりたい事がある。それは、茨城県の特産品を使った新しい料理を作る事だ。

しかし、そのためにはまだまだ知識が足りない。もつと茨城県や料理について勉強して、新しい料理が出来た時、たくさんの人に食べてもらい、その人たちを笑顔にしたい。また、この料理をきっかけに、茨城県により興味を持ってもらう手助けが出来たらいいなと思っている。

今日も美味しいご飯が食べられた。私は、それだけで幸せを感じる。

空になったお皿の前で手を合わせ。

「うちそうさま。」

私の将来の夢

茨城県立日立商業高等学校

二年

池崎 奈々香

私は将来、管理栄養士になることが夢です。

私がこの職業に就こうと思ったのは、私の祖母がきっかけです。祖母は、去年、私が高校一年生になった頃、糖尿病だということが分かりました。糖尿病だと分かった後、私の家のご飯が少し変わりました。みそ汁やおかずの味が薄くなったり、お肉料理が出るのが少なくなったりしました。母になぜ急に食事が変わったのか聞いてみると、病院で管理栄養士さんからの栄養指導があったからということが分かりました。話が終わると、母が病院からもらったプリントを見せて

くれました。見てみると、食材一つ一つの日に食べて良い量が書かれていました。母が、「これからご飯、今までと変わっちゃうから、奈々香も料理のお手伝いしてね。」と言いました。私は、聞いた直後は「部活とかもあるのに面倒だな。」と思っていました。

しかし、日が経つにつれ、食事の準備をしている母の大変さが分かるようになってきました。一人で朝食や昼食、夕食の献立を母は考えています。「一人で一日分の献立を考えるなんて自分には想像がつかないな。」と私は思いました。ですが同時に、「私も一緒に手伝って母や祖母を支えたい。」と思いました。そこで私は、今の自分にどんな手伝いができるのかを考えました。そして「まずは、料理をすること以外のことを手伝おう。」と思いました。その日から私は、食前にご飯やみそ汁を分けたり、食後に食器を洗ったりするようにしました。毎日母がやっていることの、ほんの一部しかやっていないのに、私はすぐに腰や脚が痛くなってしまいました。私は、食事の準備をすることの大変さを実感しました。これからも、手伝いを続け、少しでも母の力になれるように努力したいと思いました。

また、手伝いを始めた頃から、私は栄養関係のことを調べようにもなりました。そして将来は、食事の面から困っている人たちを支えられる職業に就きたいと思うようになり、管理栄養士を目指し始めました。管理栄養士について調べてみると、栄養士よりも高度で、専門的な仕事だということが分かりました。管理栄養士は、病気を患っている方、高齢で食事が取りづらい方など、一人一人に合わせて栄養指導や給

食管理をするということも分かりました。今の自分にできるのだろうかと不安になることが多いけれど、これからもっと努力して夢を叶えたいと思いました。

今までの自分は、人前に出ることが嫌いで自分の意見を言うことがとても苦手でした。ですが、今までの自分のままで、大人になった時、自分に関係のある周りの人たちを困らせてしまいます。だから、今まで避けてきたことにきちんとうき合い、何ごとにも挑戦していきたいと思います。

また、今までの私の将来の夢は、編集者やデザイナーなど、すぐに変えていました。将来について真剣に考えていなかったからです。

しかし、今の私は、自分の夢や目標を見つけました。夢を叶えるために努力することは、とても素晴らしく、大切だということに気づくことができました。今まで辛くて嫌いだっただけが、今では自分から進んで行うようになりました。将来の夢を見つけた前と後ではこんなに違うんだと、とても驚きました。

夢を見つけてから一年が経ち、私は高校二年生になりました。二年生にもなると、進路について考えさせられることが多くなりました。

夏休みになり、私は県内の大学一校と県外の大学一校にオープンキャンパスへ行きました。県内の大学は、友達と一緒にに行きました。初めてのオープンキャンパスで、まず、大学の広さに驚きました。在学生の方にたくさん質問することができ、今まで分からなかったことを知ることができました。県外の大学は、父と母と一緒に行きました。またしても大学

の広さに驚きました。今回は、開始時間から参加することができました。なので、大学の説明や自分の進みたい学科の先生の話を詳しく聞くことができました。大学内の見学も、たくさん時間を使い、ゆっくりと拝見することができました。どちらのオープンキャンパスも、実際に大学の雰囲気を知ることができ、とても充実したものになりました。まだ二校ほど参加できていない大学があるので、これから参加し、志望校を決めていきたいと思っています。

来年、私は高校三年生になります。管理栄養士になるためにはどうすればよいかを考え、それを行動に移せるよう努力したいです。また、私の将来の夢について一緒に考え、悩んでくれた両親に感謝したいです。そして、将来は、立派な管理栄養士になり、困っている人たちを支えられるようになりたいです。

私の将来について

茨城県立岩瀬高等学校 二年 杉山杏奈

高校生になり、進路について少しずつ考えるようになりました。大学に進学してもっと深い勉強がしたい人、就職して働きたい人、みんなそれぞれ自分たちの進む道について目を向け始めていると思います。周りの友だちの何人かは具体的に何の就職に就きたいのか決まっています、それを目指して頑張っています。私は大学に進学して、英語について学習し、将来は英語を教える職業に就きたいと考えています。

私は小学校から英語を習い始めました。最初は仲の良い友だちが習っているからという理由でしたが、次第に英語が楽しくなり、積極的に発表もするようにもなりました。中学校、高校と英語を習い続け、自分の身に付いてきたなと感じるようになってきました。

主要教科の中では英語が一番好きで、一番点数が取れます。しかし、友だちからは英語が一番嫌いだと言われてしまい、少し残念な気持ちになります。どうすれば英語が嫌いな人や苦手な人も英語が好きになるのか考えました。そこで私はわかりやすく、楽しいと思ってもらえるような仕事をしたくなりました。そう思うようになったのは、私が通っている英語の塾の先生の影響が大きいです。

先生は、いつも楽しそうに笑顔で授業をしてくれます。難しい内容ですが、気持ちが悪くなりません。そして、季節によって、様々なイベントを企画し、開催してくれます。例えば、春にはイースターパーティー、夏はスピーチコンテスト、秋はハロウィンパーティー、冬はクリスマスパーティー、他にも映画鑑賞をしたりします。もちろん全て英語で行います。小さい子から大人までいるので、先生はとても大変だと思います。でも先生は毎年毎年、工夫を凝らして、開いてくれます。そんな姿を見ていると、尊敬すると同時に、私もこんな風になりたいと思うようになりました。今の私は、「教師」になりたいたいと思っています。ただ、私にそのような仕事が務まるのかと不安になることもあります。

そんな時、英語の塾の先生が、二〇二〇年に開かれる東京オリンピックで通訳ボランティアに参加したいという話をし

た時に、私も是非参加して、たくさん外国の人たちと会話をし、少しでも自信に繋がれば良いと思いました。通訳をするとなれば、最低限、日常会話を英語でできなければなりません。しっかりと準備をして挑みたいのです。

この経験を生かして、私は英語による茨城県の観光ガイドをしてみたいと思いました。以前英語部でALTの先生に偕楽園を英語で案内する、という事業に参加した時、ALTの先生たちが興味を持って楽しそうにしていたことが心に残っているからです。偕楽園の他にも、県北にある袋田の滝や県南にある筑波山や霞ヶ浦、大洗町にある海水浴場など、自然に囲まれた雄大な観光地がたくさんあります。また食文化では納豆や干し芋が有名です。産業ではお酒や国の重要無形文化財にもなっている結城紬があります。茨城県の良さが少しでも、外国の人たちに伝えられたら、嬉しいのです。

茨城県の知名度は、正直に言って低いです。ではなぜそんなに低いのでしょうか。私は、茨城県に住んでいる、私たちがのような若い世代が、茨城県のことをよく知らないからではないかと思いました。「田舎で何もない」「田んぼと畑しかない」でも裏を返せば、「のどかで緑が多い」「お米や作物が豊富に取れる」というようになります。テレビのランク付けなどで、「茨城県には何もないから下位だ」と言われていますが、前述の通り茨城県には誇れるようなたくさんの魅力的なものがあります。私たちの世代が、その魅力的なものを受け継いでいかなければなりません。自分たちが生まれ育った土地のことを何も知らないというのは悲しいことだと思います。

将来について、まだどのようなようになるのか予想が付きません。どこでどのように暮らすのかもわかりません。未来の自分が就きたいと思う職に就いて、そこで一生懸命に仕事をしていることを願います。そして、茨城県の良いところをたくさんの人に理解してもらえよう、精一杯、努めます。そのためにも、今からしっかりと先を見据えて、生活していこうと思います。

将来の夢

茨城県立岩瀬高等学校 三年 園部 ありさ

私の将来の夢は看護師として人を救うことです。看護師を志すきっかけとなった出来事は妹の誕生です。私は小さい頃から赤ちゃんが大好きで、妹が生まれると知った時のこの上ない喜びを感じた事は今でも忘れません。母と妹の定期検診に付き添ったり、妹が生まれてからもお見舞いへ病院に足を運んだりしていました。そこで看護師さんの優しい対応や素敵な笑顔やてきぱきと働く格好良さを見ていくうちに、看護師という職業に憧れを抱き、私もこんな仕事をしたいと思いました。生まれて間もない赤ちゃんのお世話をしたいという強い思いが私を看護の道へと導いてくれました。今思えば、当時の私の行動力は一途でした。看護師になろうと決めると看護師さんの所へ行き、どうしたら看護師になれるか尋ねていました。その時の看護師さんとの会話の中で、「ありさちゃんが看護師になるまでここで待っているね。看護師になった

らここで一緒に赤ちゃんのお世話してあげようね。」という言葉が私の背中を押してくれました。自分の心の中で、沢山勉強して看護師になってここで働こうと決心しました。

そして三年前の夏、看護師になりたいという気持ちから看護師にならなければという気持ちに変わる出来事が起こりました。それは大好きな祖父の入院でした。健康診断で肺に腫瘍が見つかり、入院する事になったのです。この時、元気ではいるものの、肺の腫瘍の拡大を防ぐために服用していた抗がん剤の副作用により、髪の毛は抜け落ち、短期間で体重が減りました。それでも人前ではいつも楽しそうに笑って辛さを見せません。そんな祖父を見ているだけで何もできない自分にもどかしさを感じた私は、早く看護師になり祖父の辛さを軽くしたいと思いました。しかし、病気というものは残酷で、祖父は一度退院しましたが、二年前の秋に再発し再入院となりました。抗がん剤を使用してもなかなか腫瘍は小さくならず、強めの薬に変えることになりました。変えた薬が祖父の体に合わなかったのか、たった二日で抗がん剤の副作用が出現し、骨髄抑制、脱毛、免疫力低下、発熱と次々に祖父を苦しめていきました。経口摂取不可能なため中心静脈栄養を行い酸素投与も行われ、二日前の元気な祖父の姿はどこにもありませんでした。会いに行く度に痩せ細っていく祖父を見て死への恐怖が募っていきました。そして一年前の夏、祖父は天国へと旅立ちました。私は看護の勉強はしていましたが、まだまだ勉強も経験も浅く、プロの看護師として祖父に何かをしてあげる事はできませんでした。私は後になって、寿命は長くなくても、祖父らしく生きてもらうために薬を変

えないという選択をすれば、祖父にもあんなに辛い思いをさせずに済んだのではないかと少し後悔しています。この経験から、患者さんに提供している医療・看護はその患者さんにとって最適なのか、妥当な方法なのかを考えられるような看護師になりたいと思いました。患者さんは考えている事も、生きてきた背景も全く違います。一つ一つの情報や患者さんの性格何気ない会話からどのような看護をする事が、その患者さんにとって一番なのかを考え、実施することが大切だと思います。

今は五年一貫のこの岩瀬高校で普通教科の勉強と並行して看護の勉強・実習を行っています。去年から病院での実習が始まり、病気を患っている患者さんと実際に接してみても看護の難しさと自分の無力さを痛感しています。実習は不安ですが、せめて患者さんの前では笑顔でいたいと考え一生懸命ケアを行っています。あの時、「ありがとう。スツキリしたわ。」と言ってくださった患者さんがいました。技術は未熟で至らない点が沢山ありますが、相手を思う気持ちと一生懸命さは患者さんにも伝わるのだと感じました。提供できる技術は少なくても患者さんのことを考えて、一生懸命取り組みながら沢山の事を学び、自分の理想の看護師に近づけるよう努力していきたいという気持ちでいっぱいです。

これからも小さい頃に抱いた看護師になるという憧れと、祖父の死から得た思い、病院実習で学んだ事を胸に、一生懸命勉強に、実習に取り組み、将来の夢を叶えたいと強く願っています。無事看護師になる夢を叶えられたらこの茨城で、小さな頃約束した妹の生まれた病院で看護師として働き、貢

献したいと考えています。

